mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしております。
作品がいただけないと休刊です。

家路

がテーマの作品を募集中。ジャンル問わず
締切は発行当日00時（+2時間ぐらい）
コピー本だからさ、軽いノリで

Next Issue in May 2014
<http://www.projectkaigo.org/>

その先まだまだ続くよ

CREATURE 12 mnfikmyhk **MIXING**

春屋アロツ
川鵜鶏肋
Fu ka pon
なぎ

おうちに帰るまでがイベントです。それではみなさま、ご安全に!

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 12

転落

2013年11月3日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2013 川鶉鶏肋, 春屋アロツ, Fukapon, なぎ, まにふいくみやはか
この本は [Creative Commons Attribution 3.0 Unported License](http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/) に従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/> をご覧ください。

CONTENTS

お迎え	春屋アロツ	02
鬼神を継ぐもの	川鶺鷄肋	04
切り札はキュートなあなた	Fukapon	55
受注残の多いデータセンター	なぎ	58
締め切りを知るモノたち		60

転落 mnfikmyhk CREATURE MIXING 12

間に合うと間に合わないの間

春屋アロツ

転落、と見た瞬間に調子に乗ってステージから落っこちる図が浮かんで離れなくなりました。

<http://third.system.cx/>

川鶺鷄肋

お題をもらったときにはかなり悩みましたが、過去の転落に関する話を書くことに。おかげで随分昔に張った伏線をようやく回収できました。

Fukapon

悪化してる……。元気にやっただけで満点もらえそうなほど……。今年ががんばると言
って10ヶ月、今年が始まってないよ！ で、でもまだ2ヶ月あるからね、がんばるよ、うん。

<http://www.fukapon.com/>

なぎ

今回締め切り前日まで岩手・青森への旅行中で泊まっているホテルに考えておりました。
モチーフはタイトルの通りですが、もう少し整理して書き直したいですね。四月から転職
してデータセンターと関係の無い仕事なのですがやっぱりデータセンターが好きだなと気
づきました。

レイアウト

機材の更新を見送っている理由が理由なので、次回ちょっと不安だけど。身体動く限りや
りたいよね。

<http://www.projectkaigo.org/>

お迎え

春屋アロツ

冬もまったただ中のある月曜日の朝。雅はいつもより三十分ほど早く家を出た。二つ隣の駅で降りると、辺りを見回しながら改札を抜けた。ほとんどの人が駅に向かって歩く中を、流れに逆らって進む。歩道が広めなのと雅自身が背が高いのとで、視覚的な違和感はあっても進むに支障はない。

十分ほど歩いて、一軒の家の前で足を止めた。以前は何度となく来ていたが、最近は美紀が雅の家に来ることがほとんどで、美紀の家にはめっきり来なくなった。呼び鈴を鳴らすと、それでも耳慣れた音が鳴る。

「はい？」

「保土ヶ谷です。美紀を迎えに来ました」

「あら雅ちゃん？ちょっと待っててねー」

出たのは美紀の母親だ。待てと言われているが、玄関まで進む。と、ほどなくパタパタと足音がして、ドアが開いた。長身の二人の親にしては小柄な彼女は、雅を見上げて嬉しそうに微笑んだ。

「おはようございます」

「おはよう。久しぶりねー。あの子、そろそろ起きたと思うから、中で待ってて」

「お邪魔します」

いつもはこの家に来るとまっすぐ美紀の部屋か美紀の兄の部屋に行ったものだが、今日は美紀の母にくっついて居間に行った。

「……もしもし？」

「夕顔瀬か？不來方だ悪かったなこんなマネをして」

「不來方さんもぐるだったんですか？こんなことをしてどうするつもりなんです？」

電話口の不來方は少し黙ってから語り出した。

「このセンターがうちの会社の切り札として使われていることは知っているだろ？」

聞いたことがあった郊外にあるこのデータセンターは設備費が非常に安いだけでなく、

運用費も安く確実な運用を行ってくれるらしいと。

「郊外に設置することで設備費を下げるだけでは競争力がない確実なオペレーションを安く行う必要がある」

「それとこれとは何の関係があるっていうですか？」

「技術的な素地があって長時間働ける人材は意外と少ない。これまでの夕顔瀬の仕事ぶりで適合することがわかったのでお前にはこのセンターに三年間出向という形でこの会社に転籍して貰う。三年間働けば今の会社にもどれることになる」

「断ったらどうなるんですか」

断れる状況でないことは夕顔瀬にはわかったが聞かすにはいられなかった。

「その部屋の中でよく考えてみるだな。それでも駄目なら自主都合退社だ」

さらなる疑問を投げかける前に不來方からの電話は切れ、遠くに響くサーバルームの空調機の音だけが聞こえていた。

食卓では美紀の父がワイシャツ姿で食パンをかじっていた。美紀はもちろん、兄の浩太も姿が見えない。

「おはようございます。ご無沙汰してます」

「ああ、雅ちゃん。おはよう。悪いね、わざわざ来てもらって」

「いえ、私が言い出したことですから」

普通、友人の父親に会う機会はなかなかないが、土日に遊びに来て顔を合わせたことも少なくないし、美紀と一緒に旅行に連れて行ってもらったことがあって、雅にしてみたら親戚のおじさんのような感覚だ。食卓に座るにも気後れしない。

母が出してくれたコーヒースを口にして、「浩太さんは？」と尋ねると、

「今日は午後からって言ってたから、しばらく起きないと思うわ」

との答え。大学生だから授業の始まりも終わりも日によってまちまちなだろう。美紀もそうだが浩太も朝が弱くて、必要がなければ昼前までは寝ているらしい。

テレビの朝のニュースをBGMにしばらく話しながら待っていると、コッ、コッ、コッ、と耳慣れない音が階段の方から聞こえてきた。

「ああ、ようやく起きてきたな。美紀、お前いつもより時間がかるんだからもっと早く起きないと間に合わないだろう」

「大丈夫だって。あ、雅。おはよ」

「おはよう」

父親の小言に迎えられた美紀は、制服姿で松葉杖をつけていた。左足には黒いサポーターをしている。

「悪いーな、朝から来てもらって」

「いい。別に早起きしてるわけじゃないしな。それより、早く食

夕顔瀬結羽と先輩の不來方(こずかた)は顧客の本番設定変更に対応するため郊外のデータセンターを訪ねていた。

ずいぶんと田舎にあるデータセンターだった。東京から新幹線に乗り二時間降りた駅には

ビジネスホテルとコンビニの他には広大な駐車場だけが広がっていた。

駅前でタクシーに乗るとデータセンターの名前を告げるとそれだけで運転手は行き先がわかったらしく

確認もなく車は進み出した。

五分も走ると周りは田んぼや荒地ばかりになりこんなところにデータセンターがあるのかと思うような

景色の中をタクシーが進むこと二十分目の前に突然立派なデータセンターが見えてきた。

簡単な作業ということもあったが、その日の作業は予定していた通りに完了し後は当日と

翌営業日の午前中の待機だけとなった。

「びっくりするぐらい順調ですね。予想外の小さなトラブルも発生しないというの予想外なくらいですよ」

「ああ、そうだな。後はC社への作業報告だけだな」

不來方は貸し出された二台の構内PHSをうち一台を差し出し、

「俺はC社に報告するから、オペレーターに電話して工具を借りて

べて出ないと間に合わないぞ」

雅にも促されて、美紀は雅が引いた椅子に浅く座ると、自分のトーストに手を伸ばした。

「あれ、雅か？」

名前を呼ばれて振り返ると、美紀の兄、浩太が居間をのぞいていた。こちらはまだ起き抜けと見えて、Tシャツにスウェット姿、おまけに寝癖も派手についている。

「おはようございます。美紀が不便だろうと思って迎えに」

「マジでか。そのアホの自業自得だっのに優しーなお前」

気にせず食べていた美紀も、聞き捨てならないとばかりに振り返った。

「誰がアホだボケ兄貴」

「お前以外に誰がいるってんだよ。ライブやってる途中にステージから落ちて捻挫とか聞いたことねーよ」

美紀はぐっと言葉に詰まって、ぶいと前を向くと、残ったトーストを思い切り口に詰め込んだ。

「浩太、そんなだらしな性格で人前に出てくるな。顔洗ってきなさい」

へいへい、と適当に応えて浩太は出て行き、美紀の父はすまないね、と雅に謝った。

「うし、行くか」

「ああ」

美紀が立ち上がるのを見て、邪魔にならないよう椅子を引いてやった。コッコツと居間を出る美紀の後について出る、その前に振り返って、美紀の両親に「お邪魔しました」と声をかけた。美紀の父はにっこり笑って「行ってらっしゃい」と答えた。

きてほしい」

と夕顔瀬に依頼してきた。

「工具ですか？」

「たまにしか来れないセンターだから、ついでに配線の整理もしておきたいんだ」

「そういうことですか、わかりました」

夕顔瀬は確かにその通りだと思ってオペレーションセンターに電話をかけた。

オペレーターによると工具はサーバールームの入り口にあるということだった。

ロッカーに収められていて暗証番号がわからないと開けることができないらしい。

確かにサーバールームの入り口の近くには暗証番号を入力できるロッカーがあった。

「ロッカーの前につきましましたでしょうか？それでは暗証番号を申し上げますので入力してください」

オペレーターから伝えられた番号を入力した瞬間、夕顔瀬は急激な浮遊感を覚えた。

下を見ると立っていたはずのサーバールームの床が無くなって床下に落ちていっていることが

わかったがとっさに手を伸ばすこともできず飲み込まれていった。

柔らかいものに包まれて落下が止まる。どうやら細切れのウレタンが敷き詰められているらしく

手足を動かしても沈むばかりで立ち上げることができなかった。落下の瞬間から手に握ったままだったPHSが突然鳴った。

靴をはいている美紀の隣で、玄関先に置いてあったかばんを持つと、美紀の横で靴をはいて先にドアを開けて待つ。

「じゃー行ってくる」

「行ってらっしゃい。雅ちゃん、よろしくね」

「はい。行ってきます」

母親に玄関まで見送られて家を出る。さっきは十分ほどかけて歩いてきた道を、ゆっくり歩く。

「まだ痛むか？」

「んー、そこそこ痛え。ぶついたりしたら地獄だし」

「そうか……」

「ま、しばらくは我慢するしかねーし、そんな顔すんなよ」

痛みはどうにもならない、とわかって落胆したのが顔に出てしまったらしい。

「荷物持ってくれたりするだけですげー助かるんだから」

そう言うてにかっと笑う。これではどちらが怪我人なんだかわからない。

「こんなことくらい何でもないよ」

鬼神を継ぐもの

川鶴鷄肋

主要登場人物十の解説

よっ。今回の主人公、新川篤史だ。登場人物が増えすぎて多すぎて分かりにくいだろうから、こんなのを用意してみた。海外翻訳物の文庫の表紙折り返しによくあるだろ？ あれだよ外人の名前が次々出てくる小説だと取っつきにくくて、読み始めの頃は必須だよな。

せっかくだから俺の視点から適宜補足も入れてある。役に立つかはわからないが、本編を読みながら適宜参照してやってくれ。……何、お前は主人公じゃないだろうって？

主人公でいいんだよ。語り手がナナってだけで俺の当番会なんだから。作者のやつが言ってるから間違いないって。ここはメタ世界だから、本来ならキャラクターにはあずかり知らない筈の事情にも言及できちゃうんだよ。まあ、そんな細かいことはどうでもいいから本編読んでくれ。じゃあな。

五ヶ瀬七夏

通称ナナ。珠大附属紫城高二年生。男子。斗流十家第五位五ヶ瀬本家の長男。星鬼『九州珠口』憑き。

篤史注…男のくせに美少女すぎる。詩紀と並んで見劣りしないってのはまさに驚異。あとこいつの能力チートすぎ。さおり姉と「こーちゃんは何でもできるんだね」ふと口をついて出た言葉は、孝太郎の注意を引くにも十分なほど影があった。

「せが——星凜、先輩？」

「私がこーちゃんを知っていたの、同じ美化委員だからってだけじゃないの」

「えっ、そうなんですか？」

「本人は気付かないんだろうけどさ、有名人だもん。一年生の天才くん」

「ああ……」
入学以来、定期試験で「完全試合」を続けている彼の異名。今ではもちろん、本人の耳にも届いていた。

星凜も知っていて当然だと彼が気付かなかったのは、天才くんにも苦手はあるからだろう。今やそのことに気付いた彼女たちのオモチャだ。

「いいわ、教えてあげる。こーちゃんがどんな子なのかをね。いらっしやい」

二人は星凜が腕を引く形で、近くにあった駅ビルへと入った。急な暖かさに彼の眼鏡が曇り気味だったが、ぴったりとガイドする彼女は歩みを緩めない。

ツカツカと売り場を突っ切り、星凜はドアを一枚押し開けた。「……！」

「さすがは天才くん。声を出せないってわかってるのね」
声にならない悲鳴を上げた孝太郎を、星凜は鏡の前に押し出した。
「ねえ、見て。こーちゃんはきっちり可愛い女の子よ？ 私より

は別の意味でお志摩さんの後継者だろうな。

新川詩紀

珠大附属紫城高二年生。七夏の婚約者。斗流十家第一位新川家の養女。双子の妹である美紀と二つの魂で身体を共用する『二連精魂』にして、ドゥーベの星鬼『樞』憑き。偶然を司る女神『白銀珠比女命』の称号を持ち、事実上の斗流次期宗家として扱われている。

篤史注…She is Providence. 七夏以上にチート。俺の義妹がなぜか魔王さま。詩紀は微妙にクーデレ風味で美紀は微妙にツンデレ風味とは七夏の弁だが、はっきり言って区別つかんね。

新川篤史

珠大附属紫城高三年生。斗流十家第一位新川家の長男、詩紀の義理の兄。鬼斬り。アリオトの星鬼『衝』を好んで使う。

篤史注…俺のこと。どうでもいいや。とにかく本編を読め。

遠野結香

珠大附属紫城高三年生。斗流十家第十位遠野家の最後の生き残りにして篤史の婚約者。メグレズの星鬼『権』憑き。篤史は子供頃のあだ名で『ゆっか』と呼ぶ。

篤史注…ノーコメント。断じてノーコメント。

宮藤初

珠大附属紫城高三年生。斗流十家第九位宮藤家の娘。フォーマルハウトの星鬼『北落師門』を左腕に宿す。

可愛いぐらい」

にやりと音が聞こえそうな笑みは、彼が思っている彼女ではなかった。

そう、まるで彼女のように——

「あら、楽しそうじゃない？ 彼女とデートかしら」

声とともに鏡に映ったのは、ラテックスのコートを纏った彼女だった。

甘い妄想は、女子生徒に声を掛けられた己が、女装した男子生徒であることを忘れさせたようだ。彼は事もなげに答えながら、顔を上げた。

「済みません。大丈夫で……す……！」
そして、別の非常事態には気付いた。

目の前にいたのは裏庭を清掃していた女子生徒、瀬川星凜だったのだ。

驚いたのは彼だけではない。星凜も非常、元い異常事態に声をうわすらせた。

「岸田、くん？」

「せ、瀬川先輩っ！」

舞い上がった彼に、彼女の怪訝な表情に気付けというのは酷な注文だろう。

しかし気付かぬ現実はずっと過酷だ。星凜はためらいがちに、少し遠回しに告げた。

「えっと、趣味なのかな？」

「何がですか？」

「……女装」

「あ、あああああああああ！」

前門の虎、後門の狼。

一難去ってまた一難という本来の意味でも、後ろの門が閉じられていたという文字通りの意味でも。

「いいいやああ違う違う、違うから！」

大慌てで背後の引き戸を開けようとするも、ピクリとも動かない。

引きつる笑顔の少女と、引き戸に縋り付く美少女。二人の初め

篤史注…御庭番メイド姉。性格はジャスティス寄り。格闘戦は打撃寄り。

宮藤終

珠大附属紫城高三年生。双子の姉である終と共有する形で、右腕に『北落師門』を宿す。

篤史注…御庭番メイド妹。性格はフリーダム寄り。格闘戦はサブミッション寄り。

七瀬撫菜

珠大附属紫城高一年生。斗流十家第七位七瀬家の娘。通称ペン。右目に『弧矢』がいているが、普段は眼帯着用。

篤史注…不思議ちゃん。ゴルゴと言うか、むしろサイトローかな。なぜなイコールペンペン草ね、念のため。

七瀬鈴菜

珠大附属紫城高一年生。ペンペンの双子の妹。通称リンリン。

篤史注…アホの子。突撃隊長。のけぞり無効&常時全身攻撃判定。黒旋風李達みたいな立ち位置だな。

新川さおり

珠大附属紫城高の教諭。詩紀や篤史の従姉にして担任。『ハートの女王』『鬼婆』といった異名を持つ。同盟関係にあるベネトナシユの星鬼『揺』に身体を貸し、珠坂商工会議所会頭『四三揺子』なる架空の人物を名乗らせる事あり。

ての会話はだいぶ変わったシチュエーションで始まった。
「いいいいいよ。趣味は人それぞれだもん」

「違うんです。今、図書室で——」

もちろん会話の内容も普通じゃない。男の娘と化した彼、岸田孝太郎は図書室での、知らない女性との出来事を一所懸命に説明する。

彼自身ですら信じてもらえぬだろうと思った説明に、彼女はケロツとした反応だった。

「そっか。災難だったね」

ありきたりな言葉を返した彼女に、孝太郎は見とれた。訝しげな表情はすっかり消え、憧れの笑顔そのものが彼に向けられたのだ。悪夢から一転、夢のような時間はまだ終わらない。

「でもせっかく可愛くなっただから、お出かけしよっか」

「えっ？」

「デートしよ？ 嫌かな？」

「は、はい……」

へなへたとへたり込む彼に、彼女は再び、手を差し伸べた。

クリスマス直前、煌びやかな街の中を腕組んで歩く二人。

カップルか、女の子同士か。いずれにせよ、二人は見事に溶け込んでいる。

「こーちゃん、可愛いんだから堂々と胸張って」

「そ、そんなこと言われなくても……」

「あーん、仕事すら可愛いなんてずるいっ」

寒空の下、コートを着て制服を隠してもなお男の娘を保つ彼に、星凜はいたずら心を忘れて舌を巻いた。

陸奥十悟

珠大附属紫城高の教諭。ジュウ兄と呼ばれることも。斗流十家第六位陸奥家の次期当主。さおりの同級生。星鬼『巻舌』の使役を得意とする。

篤史注…基本的に文系で格闘には不向きなのは名前負けの、頼りになるようなならないような兄貴分だ。俺たちさおり姉被害者同盟の代表でもある。

芳村黒男

斗流内部粛清部隊『櫛』の司令。表向きは銀行員。四三家傍流の出身。睡蓮の父親。

篤史注…嫁さん亡くしてすぐに若くて綺麗なお姉さんと再婚した罰当たりなおっさんだが、尊敬にたる鬼斬りの中の鬼斬りの一人でもある。だがやっぱり許せんなあ。

芳村志摩

旧姓後藤。通称お志摩さん。黒男の前妻。睡蓮の母親。故人。矢車の再来と詠われたマジックアイテム制作の天才。死してなお斗流に強い影響を残している。

篤史注…さおり姉をあんな風に育て上げた戦犯の一人だな。いまだに何かあるたび、彼女作のアイテムが「こういう事もあろうかと」ばかりに登場してくる。未来予知してたと思えん。

芳村玲韻

旧姓四三。黒男の妻。レーヴァテインのクロヒメ。商工会頭秘書として珠坂経済界を實質支配する。

篤史注…さおり姉とならび、絶対に逆らっちゃいけないお姉さんの一人だ。彼女達クロヒメは剣の精霊としての性質を持ち、鬼使いでも鬼憑きでも呪術でもない固有の特異能力を備えている。敵じゃなくて良かったとつくづく思うね。

竜胆大輔

珠大附属紫城高一年生。斗流十家第六位陸奥家傍系竜胆家の長男。星鬼『尚書』憑き。他人とは異なる歴史を記憶しているため前世系中二病をこじらせており、陸奥家からは長らく恥部扱いされ半軟禁状態とされていた。

篤史注…リ○デ○ング○シ○タ○ナーみたいもんだが…：本人にもどこまで妄想なのか正確にわからんのだそう。あれで悪いやつじゃないんだが、全面的に信用しちゃうって大丈夫かはちと疑問だな。

芳村睡蓮

珠大附属紫城高一年生。ダインスレイフのクロヒメ。大輔の『相棒』。

篤史注…ちびでこッンデレ娘。いかにもCV釘○さんって感じ(笑)。黒男さんとお志摩さんの娘で玲韻さんの弟子、しかもクロヒメという危険人物。あの大輔を操縦できている点だけでも、一筋縄じゃいかん人物だったのは間違いないな。

切り札はキュートなあなた

Jukapon

「用のない生徒はとっとと帰りなさい」

振り返った男子生徒の表情からは、驚いた様子が見て取れた。

視線の先では、笑みを浮かべた女性が言葉が続ける。

「だいたい図書室は本を読みに来るところよ。あなた、何してたの?」

驚きからうろたえへと表情を変える男子生徒に、彼女は視線を絡める。さらに不敵な表情を声にも載せて核心を突いた。

「物陰から女の子を覗くなんて趣味が悪いわ」

「そ、そんな…」

「言い訳なんて男らしくないわよ。尤も、君の強みはそこだけだね」

彼女は完璧なウィンクを決めて、ムッチリとした身体を彼にぐいと寄せた。

ボデイラインを露わにするラテックスのスーツが、彼女が学校関係者でないことを物語っていた。

いつもの彼だったら、その違和感を口に出して指摘したかも知れない。しかし今は、彼女のなすがまま。

「おとなしくしてなさい。すぐに素敵になれるわ」

小さく甘い囁きとともに、彼女は慣れた手つきで、彼の制服のボタンに手を掛ける。

そして十分足らずの後、図書室には甲高い声が響き渡った。

「あははははー、よく似合ってるよー」

野口緋咲子

珠大附属紫城高二年A組担任。担当教科は現代国語。見た目は美人だが中身はゆるキャラ。

篤史注…俺にとっては甘酸っぱい記憶と残念な現実の象徴だ。どこかの誰かさんにそっくりな気もするが、気にしない気にしない。

「あの、これ、どうい…?」

涙を流しながら笑う女性とは対照的に、彼は啞然と表情を失い、己の衣服を確認した。

上半身は黒から白に変わり、下半身は、肌色が覗いている。

白いセーラー服を纏い、膝丈のスカートを穿いていた。

彼はスカートの裾を軽く上げて、足を動かしている。頬をつねる代わりだろうか。信じられない現実を、確かめ続けている。

啞然としているのが、受け入れられなろうが、彼女はお構いなしだ。

「あの子、瀬川星凜が好きなんだろう?」

「…：そ、そうですけど」

頭から爪先まで学校に似つかわしくない彼女だが、ものの言い方だけは教師のよう。逆らうことを許さない、秘めた想いをも言わせるだけの力がある。

アダルトビデオに出てくる女教師。そんな形がびったりの彼女の、初めての指導。

「星凜ちゃん、男の子が苦手なの。その格好でアタックしてらっしゃい」

彼女は彼の細い腰を引き寄せて、無理矢理に廊下の外へと放り出した。

「だ、大丈夫ですか?」

勢い余ってつんのめり、眼鏡を押さえる彼を迎えたのは、温かな声。

顔こそ見えないが優しい女の子に違いない。瀬川先輩の声はきつとこんなだろうなど、窓外に見つめた彼女を反芻する。

能力を借りて尋問してみると、樞を信仰する各種族を代表してのメッセンジャー兼押しかけ用心棒志願と判明した。

当然のように大紛糾となったが、詩紀ちゃんが大幅に強化された発言力を最大限に利用して（横車を押しまくったとも言う）強引に彼らの受け入れを決めた。そればかりか、それぞれ大聖・元帥・大将の称号を与えられた彼らは、宮藤の双子の管理下に置かれつつも詩紀ちゃんの傍近く仕えることになってしまった。宗家が初仕事で斗流の本拠地にバケモノを呼び込んで常時居座らせるなど、自分で身を守るだけの力を持たない文官達は発狂ものだろう。

かく言う七夏としてこの馬鹿げた選択にデメリットを上回るメリットがあるとは思えないし、単なる嫌がらせのような気がしないでもない。斗流のためにもこの国のためにもならぬ人物を率先して擁立し、あるうことか宗家に据えてしまった、という可能性も十分以上にあるのだが……そんな事は瑣事に過ぎない。

篤史さんはただ結香さんの鎮魂のためだけに妹を敵に回し、さらに国を危険にさらすことさえやってのけた。ならば七夏は、世界の存亡を天秤に掛けてでも詩紀ちゃんを支持し続けると誓おう。篤史さん以上に覇気がないと酷評される七夏にだって、このぐらゐの負けん気はあるところを見せておかないと。大切な彼女に見捨てられないように。

鬼神を継ぐもの

五ヶ瀬七夏が現在直面している状況を説明するには、まずは篤史さんについて語らねばならない。

新川篤史さんは、詩紀ちゃんの義理の兄にあたる人物だ。

七夏の一学年上で、宮藤の双子姉妹と同じ歳。成績では文武を問わず人後におちることはない優等生。

百八十センチをこえる長身と引き締まった筋肉質な体つきに、わえて絵に描いたようなハンサムっぷりで、精悍という言葉こそが相応しい。頻繁に女子とまちがえられる七夏には羨ましい限り。紫城高等部で一二を争う有名なカップルの片割れと知りつつも秋波を送る女子が少なくないのも納得だ。

かつて幼なじみ達が揃ってつるんでいた頃。年の離れた十悟兄さんやさおりさんはあまりにもレベルが違いすぎて張り合う対象にはなりえなかったが、篤史さんは僕らにとっては近い歳の兄貴分であるだけに、かえてその凄さがわかりやすかった。

腕力、運動神経、頭の回転、そしてリーダーシップ。単純な能力の点でも他の子供達とは一線を画していたが、ただそれだけではない。子供らしからぬ堂々とした風格を備え、これまで落ち着いていた雰囲気のある宮藤の双子を部下のように引き連れた（今思えば、実際その通りだったのだが）篤史さんは、子供達の中ではぬきんでたカリスマだった。神童という言葉はあの頃の彼のためにあるような言葉だった。

だが篤史兄さんは小学二年の夏、隠居したお爺さんの元へと引っ越していき、翌年には七夏自身も訳あって珠坂を離れる事にな

った。

そして十年ぶりに珠坂で再会した時には、彼は様変わりしていた。

容姿という点ではまさに納得の正常進化で、一目見て彼と確信できたのだが……万事において隙の無かったあの篤史兄さんが、いかにも俗っぽい雰囲気をもとうようになっていたのには少々幻滅させられたものだ。

軽薄な表情とオタク発言さえ控えれば完璧な快男子だと言うのに、どうしてこんな残念な事になってしまったのか。お爺さんの喜一老のもとで薫陶を受けてきたのではなかったのだろうか。あるいは、篤史兄さんの飄々とした態度は彼の複雑な立場にも関係しているのかもしれないが。

うちの両親の態度から類推すると、むしろオタクこそがこいらの旧家の英才教育の神髄なのかもしれないなどと邪推してみたりするが、絶対無いとは言えないのが怖い。いや、そんなのはどうでもいいか。

篤史さんの劣化っぷりは気にかかったものの、当時の七夏はそれ以上深入りすることはなかった。正確に言うならば、そんな些細な事情にかかざりあっている余裕など彼には無かった。両親の方針でこの歳まで何一つ事情を知らされてこなかった七夏は、珠坂帰還直後から世界観がひっくり返るような冒険に幾度となく巻き込まれていたからだ。どこの伝奇系ラノベだとボヤきたくなるようなエピソードがてんこ盛り。どれもこれも出来すぎで、いかにも故芳村志摩さんかさおりさん辺りの仕込みとしか思えなかったものだが、当のさおりさんはそれこそが珠坂という街だと言っ

て憚らない。

彼女によれば、珠坂は日本列島の霊的防衛陣の中心として設計された街だそう。そして、珠坂の主は同時にこの国の闇の半分を支配する者、帝の守護者にして共同統治者であるとみなされているとのこと。そこまで来るとちと眉唾だが、ここ珠坂には斗流十家と呼ばれる旧家群があり、各方面にいまだに強い影響力を残しているのは確かだ。彼らは血脈に封じた鬼の力をもって鬼を使役しつつ、古来より妖魅を討伐し人を制して国を守り続けてきたとされており、その血脈は未だに保たれ続けている。

さっと挙げられるだけでも、黒男さんや玲韻さんの芳村家、十悟兄の陸奥家、撫菜・鈴菜の七瀬家、初・終さんの宮藤家、結香さんの遠野家、それから五ヶ瀬家。本家と分家、正当七家と新三家という差はあっても、いずれも斗流十家に繋がる古い家柄で、鬼使いの血を引いているらしい。

一年前の七夏ならば中二妄想乙と笑い飛ばしてしまっていたであろう内容だが……ここ半年かそこらの間に魔物を討つための特殊技術や人間離れた能力を散々目にしてきたばかりか、かく言う七夏自身にしてからが九州珠口まろしゅうぐちなんてわけのわからない鬼に憑かれてちょっとした魔法使いもどきになってしまっているのだから、否定したくてもできるものではない。

篤史さんは十家筆頭の新川家本家長男。しかも鬼を使う鬼斬りの才能を持つ彼は本来ならば斗流を継いで当然の立場だ。

先代の喜一さんの引退に伴い、斗流宗家の座は現在ではさおりさんが代理として預かっている状態であり、次期宗家は最高位の星鬼北斗七鬼のさらに頭たる樞くまの憑いた詩紀ちゃんということになっている。

魔物どころか会場スタッフの一人も残っていないが、現場の後片付けまでは責任もてない。

さおりさん達の姿まで無いのには納得いかないが、あとで精々面倒かけさせてもらおう。今回の騒ぎもどうせあの人の青写真なんだろうし。

「なんでナナ残ってるの？」

「僕には帰ってほしくないって思ってたでしょ？ 効くはずがないよ」

「そういうこっ恥ずかしい物言いをするなと何度言ったら！」

実際には詩紀ちゃんの呪歌に抵抗するのはなかなか骨が折れたが、黙っておこう。抵抗できたってこと自体が普通じゃないのだから。

どうやって帰るか考えてなかったが、彼女と一緒になら、歩いて帰るのもオツだろう。

「足があるわね。さて何を喚ぼうかしら。だいぶ子分も増えたしね」

「こちらこちら」

バケモノとかタクシーにしちゃだめだろう。

詩紀ちゃんが正式に斗流宗家を継いだとはいえ、七夏達の生活は大して代わり映えしなかった。

だが、いくつかの小さな変化は確かにあった。

後日談その一。

一部とはいえ樞を実体化という無茶苦茶をやった篤史さん。消

詩紀ちゃんはもともとは斗流の中では傍系も傍系の出だと言う。新川家が彼女を養女にとったのは、危険きわまりない樞憑きを管理するために手に届く範囲におくための名目だろうことは想像に難くない。しかも彼女は恐ろしく扱いの難しい娘だ(彼氏の七夏が言うのだから間違いない)。傀儡の御輿に据えてみたとして、誰かが思うように動かせるようなタマではないから、そこまでして横車を押すほどの価値はないだろう。

篤史さんの鬼斬りとしての才能は決して詩紀ちゃんに劣るものではない。七夏の素人目からもそのぐらいはわかる。詩紀ちゃんには悪いが、人物の大きさと点でも篤史さんがだいぶ上だ。篤史さんがどうしようもないボンクラとか言うのならともかく、最も血の濃い第一継承者にこれと言って目立った欠点がないのだから、そうそうお家騒動が起るような複雑な状況ではない筈だ。では、詩紀ちゃんが宗家ということでも誰かが納得しているのはどういう事なのだろうか。篤史さんほどの人物が妹の後塵を拝する立場に甘んじているのも不思議で仕方ない。確かに篤史さんは野心とか表に出すタイプではないが、詩紀ちゃんにああもポロクソに言われてばかりでは、さすがの彼でもカチンと来そうなものだ。

「兄さんには人間レベルの覇気が備わっていないよね。せいぜいカタツムリ程度かしら」

とある日の放課後。幼なじみ達が集まったときに、詩紀ちゃんが挑発的に言ったことがある。

彼女は基本的に他人に対する評点が辛く、愛想に乏しく、しかも発言が容赦ない。

耗のため三日三晩足が立たなかったとのことだが、むしろその回復の早さには驚くしかない。さすがに白髪が治るまでには半年ほどかかった模様だが。

一方、篤史さんから妄想の産物と思われる事が発覚した結香さん。さすがの彼女も腹に据えかねたらしく。篤史さんは丸一日の間、口をきいてももらえなかったそう。たった一日のストライキでは大した効果もなさそうだが、結香さんの方が我慢できなかったのだろう、きっと。

ごちそうさま。

さらに後日談その二。

今回のバカ騒ぎには案の定さおりさんが一枚噛んでいた。詩紀ちゃんが問い詰めてみたところ、篤史さんの抱えていた葛藤も勘違いも何もかも承知の上で、彼が参戦するのも爆発するのも計算の内だったようだから、相も変わらずの悪辣さである。

だ、がさしもの彼女も樞の登場までは計算外だったとみえる。表の世界の重鎮達に斗流宗家クラスの実力を見せつけて適当にブレッシャーを掛けておきたかったのだろうが、必要以上に震え上がらせてしまったらしい。後片付けは物理面でも精神面でも相当手が掛かったに違いない。

ざまみろ。

そして後日談その三。

宗家継承より一週間ほど後より、寮や学校の周りを数匹のバケモノがうろつくようになった。正確に言えば猿人間っぽいのと猪人間っぽいのと魚人の三体。とっ捕まえた七夏が北落師門の通訳

野口先生を慕い、彼女を中心に団結できるのだろう。その様子を見たてて誰が呼んだか緋咲ちゃんファンクラブ。

ちなみに、豪快で理不尽な完璧超人さおり姉が担任を務めるB組はさおり一家呼ばわりされているが、由来については深く語るまい。

さらにどうでもいいが、生徒への介入を好まない陸奥十悟兄さんが担任の我がC組は、放任状態から自然発生した中央集権的カーストにより奇妙に統制されている。その様子を人呼んで詩紀様王朝だそう。詩紀ちゃんが女王様はまさに適任だが、七夏が摂政か何かのように扱われているのはどうにも面はゆいと言うか分不相応に感じられるが、どうだろうか。直接彼女と話すのは畏れ多いから七夏を介して、という感覚は分からなくもないのだが。

話が逸れまくったが、結香さんがこのまま進学してよしんば教職にいたりしたら、まさに野口先生みたいになるだろう。二人は身につけた雰囲気やしゃべり方だけでなく顔立ちを含めた容姿もかなり似ており、結香さんをして「ほら、あの、新川兄と一緒にいるプチ緋咲ちゃん」なんて言われることもある。実は年の離れた姉妹だと言われても納得してしまいそうだが、別に親戚というわけではないそう。珠坂は旧來人の出入りが少なかつた土地なので、何百年単位での血の繋がりは否定できないが、それは誰と誰をつかまえても同じように言える話だ。

かくのごとく、遠野結香さんという人物は、これといった蹉跌もなく幸せに過ごし、常に誰かに保護されてきたゆえに警戒心を発達させてぬまま素直に育った、という典型に思える。そんな天真爛漫な結香さんの対人スタイルは常に真つ向勝負のノーガード十全力タックルで、あさつての方向につっこむ事もたびたびだが、

皆、嫌な笑みを浮かべつつ、得心したように頷いている。

「納得するなよお前ら。って言うか、なんで気づいてんだよ！」
わからいでか。

当時高校生だった野口緋咲子先生を見る篤史さんの目は憧れにキラキラしていたものだ。あれで誰にも気づかれていないと思っていたとは恐れ入る。

「……参った。いや、いちいちナナの言う通りだ。去年のこいつはほんとうにあの頃の、ガキンチョそのものだったからな。これでもだいぶ年齢相応になったんだぜ……」

はああああああ、と大きく長いため息をつき。

「俺としたことが、何やってたんだろうな」

それから篤史さんは詩紀ちゃんに向き直る。

「樞を返す。なんとかして暴走を抑えてみせろ。できるな？ 詩紀」

彼は既に、厳しくも頼もしい兄としての顔を取り戻していた。

「それが私の役目だから」

「合格だ」

篤史さんが頷くとともに、六本の触手が地面に引き込まれていく。同時に膝が落ちる。彼の髪は白く変じ、樞招来に伴う消耗の激しさを物語っていた。

眉を寄せ歯を食いしばる詩紀ちゃん。七夏はその左手を取る。

「頑張れ、詩紀ちゃんに美紀ちゃん。僕がついてる」

「邪魔しないで、私一人で十分よ」

相変わらずきついついが、これが照れ隠しの感謝の表現だというのは学習済みだ。

ほどなく彼女は身体の力を抜く。ふう、と大きく一息つくと、

そのときは誰かが下敷きになっても受け止めてくれるから良かったものだ。

一方の詩紀ちゃんの対人スタイルは、確実に急所を守るピーカーブー。ガードの隙間から相手を伺いつつ、相手の出方を伺うための挑発的な攻撃を繰り返し、反撃の有無を見極めようとする。

彼女はいわば猜疑心の固まりだから、信頼した筈の相手に対してもたびたび忠誠心を試さずにはいられない。態度は自信満々で高圧的に見えるが、自分の感性に賭けることも他人をひとまず信頼することも怖がっているのだ。一応は彼氏という立場の七夏にしても彼女に心を開いてもらうのには相当苦労したものだ。

もともと七夏的にはツンデレ&クーデレウェルカムなわけで、信頼したいという思いの裏返しで攻撃を仕掛けてみるそのへんこそが詩紀ちゃん（&身体を共有する双子の姉妹の美紀ちゃん）の最も魅力的な部分なのだが。たびたび彼女に試されることを嬉しいと思ってしまうのは、もしかして特殊性癖の詩紀信者の精神機序に近いのかもしれない（彼らに対するつれない態度を愛ゆえと解釈するのはさすがに曲解がすぎる気がするが）。

幸いなことに、彼女のきつさや頑なな態度は現時点ではむしろカリスマの醸成に一役買っているし、皆楽しんで彼女をクラス団結の象徴として持ち上げている。しかし今後他の人間が皆同じように受け取ってくれるなんて楽観はできない。何の実権もない象徴的美少女であってくれたならばどれだけ良かったか。そうならば七夏も一緒になつてふざけていられたものを。彼女は取り扱いの難しい最終兵器だ。意識的・無意識的にかかわらず、ひとたび落ち込んだ彼女達がどれだけ壊滅的なことをやらかすかについての前例は枚挙にいとまがない。

ウィンクとともに右の親指を立ててみせた。

人工芝に身を横たえた白髪の篤史さんは、その様子を見て満足げに言う、

「よくやった、それでこそ斗流宗家……ガクリ」

わざとらしく目を閉じ、首を落とした。どう見ても死んだふり散々皆に迷惑を掛けたあげく最後までこれとは、つくづく業が深い。

「ただいまの新川篤史君の発言、ギブアップ宣言と見なしでも構わないか？」

そこはかとなない笑みを浮かべながら、審判役の黒男さんが言った。

「ああ。完敗だ」

しばしの気まずい沈黙の後、不承不承といった様子で篤史さんが応える。ほらやっぱり生きてた。

「よろしい。これをもって、最終ステージの勝者はのりちゃんチームと決定。同チームに300点加算により、総合優勝はのりちゃんチーム、従って斗流宗家の継承権は新川詩紀嬢とあいになった。皆、勝者にも敗者にも盛大な拍手を！」

万雷の拍手に、詩紀コールと篤史コール。

そして、べたべた言う濡れた音の拍手、イアアコールに樞コールが気になって仕方ない。

「さて、他でもない罰ゲームの件だが」

「あるんかよ！」

がばつ、と身を起こした篤史さんが抗議する。

「勘弁してくれよ、もう恥ずかしいネタは暴露されちゃったんだから」

彼の態度ときたら、自分を倒してくれと言わんばかりではないか。

「篤史さんはもう諦めたかった、そして誰かに罰して欲しかったんでしょ？ 身内だろうと手加減せずにはたたきつぶして、詩紀ちゃんこそが宗家に相応しいと証明して。たとえ樞を呼び出したところで、絶対に詩紀ちゃんには勝てなかったって事実が欲しかったんだ」

兄妹揃って偽悪的で内罰的。弱ったものだ。

「……そうかもしれない。だが、俺が戦わずして負けを認めてしまつたら、俺を信じて付いてきてくれたあいつの死が無駄になつちまう」

「その気持ちは分からなくもありませんけどね。前提条件がおかしいんですよ」

「はあ？」

「篤史さん、一番大事なことを勘違いしてますよ」

七夏は人形、いや結香さんを指さし、言った。

「篤史さんの知る結香さんは、今でも篤史さんのそばにいます。それを生きていると言って良いのなのですが、お志摩さんの生人形なら人間と変わりませんよ」

結香さんは篤史さんに向かって、にっこり、とゆるい笑いを返すと、小さく手を振った。

「……！」

数秒かかってようやく意味を理解した篤史さんは、何度も何度も首を振りながら否定しようとする。

「いや、そんなはずはない。あれは星鬼の、権はかりの擬態にすぎないぞ」

前置きが随分長くなったが、結香さんと詩紀ちゃん、同年代の美少女としてジャンル分けされる二人のメンタリティーは、トイブードルと野良猫ぐらいに違う事をご理解いただけただろう。

しかし二人の間柄は至って穏やかなもので、七夏やその他誰かの介入を必要とすることは多くない。

「たかがゲームの勝負でしょ？ ちっちゃ。人間性とか心根がミジニコなみにちっちゃいんじゃない？」

と、詩紀ちゃんは結香さんの自殺点に追い打ちするように篤史さんを貶めにかかったのだが、介入してきた結香さんに矛先を転じるつもりはないようだった。

いかに詩紀ちゃんでも、徹底して無防備な結香さんに攻撃的な台詞をぶつけるには躊躇があるようだ。なにしろ、結香さんへの攻撃は反撃に繋がらない。腰の入らないジャブを何発喰らわせようが痛いと感じさせる事も出来ず、抱きつかれて頼ずりされるのが関の山だ。裏も表もなく、みんな大好きーを全力で表現して憚らない彼女に対して忠誠心を試そうなどとしても、自己嫌悪を感じさせるだけの結果に終わるだろう。そういう自己防衛の手腕については、詩紀ちゃんは本当に敏感だから。

だが、それだけではないようでもある。あくまでも直感頼りのためうまく説明したいが、詩紀ちゃんの態度には、結香さんに対する何らかの苦手意識、と言うか遠慮のようなものも感じられる。

「その分大きいんだよ。その、物理的にな」

胸を張りにやりと笑みを浮かべた篤史さんの返答は、何と言うか、アレだった。

「最低ね」

篤史さんにしてみれば安易に誘惑に飛びつけないだろう。希望的観測など結局自分をより傷つけるだけのものになりかねないのだから。肯定的な言葉一つで簡単に信じていいようなものではない。

だが。冷静に考えをめぐらせてみるならば、証拠などいくつもあるものだ。

「罪を認められない弱い心が逃げ場として偽の結香さんの人格を作り出してしまった、とても思いこみたかったんでしょうけど。僕が見る限り、そのヒトガタは結香さんの魂を納めるべく最適化されていますよ。人形に変化の鬼を憑かせて人の身体の代用にするなんて、いかにもお志摩さんがやりそうなことじゃないですか。復活直後は七歳のままの彼女だったかもしれないませんが、それからの成長、篤史さんなら感じとれるはずですよ」

七夏が詩紀ちゃんのささやかだが着実な成長を喜べるように。「それに、憑いた星鬼の異能を発揮できるということ自体が、人としての魂が備わっている証拠じゃありませんか。そこに気づかなかったってのは篤史さんとしては迂闊だと思えますけど、さすがの篤史さんも身内のことでは頭が回りませんでしたかね」

そしてだめ押し。

「さらにもう一つの証拠は、今の結香さんが篤史さんの記憶の中の彼女さんではなく、篤史さんの初恋の人である野口先生の容姿を備えているって点です。まさに結香さん本人の意志の反映でしかあり得ませんよ。例え自分が自分でなくなっても構わないから、篤史さんに好きになって欲しいなんて。いやあ、お熱いですよねえ」

「なっ、おまっ!？」

七夏が躊躇した言葉を、詩紀ちゃんのはっきりと口にした。

「下品きわまりませんね」

「地上における最も愚劣な部類の冗談です」

続いて、宮藤の双子によるめった打ち。

「なんだか知らんがとにかく篤史兄ちゃんはサイテー。リンリン覚えた」

「篤史兄さんが最低なのはもはや宇宙の心理と言っている」

さらに、七瀬の双子によって人間的に完全否定。まさにフルボッコ。

さすがに少し気の毒になってくるが、女の子率が高い場所です。ちやっつた篤史さんが全面的に悪いので、下手をうつと藪蛇になりそうなフォロワーは行わないことにする。

すでにピョッているところへなおも続く連続口撃でノックアウト寸前の篤史さんに救いの手をさしのべたのは、やはり結香さんだった。

「でも篤史ちゃん、本当におっきいから」

救いじゃなかった!？」

しかもノーガード過ぎる！

「「おっきいのかっ!？」」

「しっ、潮騒キボンヌ！」

「四百字詰め原稿用紙五枚、三日以内に詳しいレポートを。内容の機密レベルに応じ謝礼を検討。画像の添付があればなお高評価」

一斉に食いつく女性陣。品がなさ過ぎるだろう。特にリンペン、目やばい。

「おっきいよ。ナナちゃんは私よりちょっと大きいぐらいだし、十悟さんはすらっとしてるけど、篤史ちゃんにはかなわないよ

ね？ 男の人としてはかなり大きい方だと思うけど」

……結香さんの、何が、何だって？

聞き捨てならない発言に、しばしの間、皆沈黙考する。

「いやいやいや、身長の話じゃないから」

最初にたどり着いたのは詩紀ちゃんだった。いや、今のツッコミは美紀ちゃんの方が。

「そう、もっともって大切なこと」

「だから正確に答えて欲しい。ナナちゃんに入るかどうかの瀬戸際」

この暴走中学生どもを何とか黙らせねばならない。女の子が公衆の面前で言っているなら単語を口にする前に。多少の実力行使も辞すまい、と拳を固めたところで、

「身長の話だよ。何言ってるんだ」

深夜通販番組組のガイジンさんよろしく大げさに肩をすくめ、篤史さんが飄々と言った。

「それとも何か？ もっと別の、それこそ下品で愚劣で最低な何かの話と、下品で愚劣で最低なお前らが勘違いしたと、そういうことか？」

一人一人に向き直りつつ、人差し指を立てた拳を打ち振り、一言一言に力を込めて。

「馬場さんに謝れ！ お前らが一体何を想像したのか、じつくり聞かせてもらいたいもんだ」

呆れると同時に、さすがだと思った。

自らミスリードしておいて糾弾の方向性をひっくり返す。冤罪と確定した者は単に当該容疑について無罪であるだけだが、あなたも正義の担い手であるかのように感じられるという感情的錯覚

篤史さんがまたやってる。ほんとに業が深い。

「自分の野心のために禁呪に手を出すような悪者の俺にさえ勝てないで、斗流宗家を継ごうとは片腹痛いわ！」

「うっさい黙りなさいよ、このバカ兄貴！ 勝手にひがんで勝手に自滅してちゃ世話無いわ！」

詩紀ちゃんのすました態度もだいたい崩れてきた。篤史さん相手に美紀ちゃんが出てきてる。

しかし、状況は芳しくない。

同時行使に伴う精神力の急激な消耗に従い、術式の力がだいたい弱ってきているのが実感される。このままでは攻撃を打ち消しきれなくなるのも時間の問題だ。

だが、そうはならない。

おかし。

そもそも、七夏に凌げる程度の攻撃力では、不完全とはいえ樞の顕現としてはあまりにも貧弱すぎる。意識的か無意識にかはわからないが、篤史さんが手加減しているのだろうか。そうだとすればまだ説得に期待が持てるのだが。

おかし。

客席を守る陣の防御力もあまりにも高すぎる。七夏が一撃一撃に集中して辛うじて受けられている攻撃から広範囲をほぼ完全に守りきっている。

おかし。

篤史さんの指揮下にある結香さんは防衛に徹し、四人がかりの攻撃を完全に抑えきっている。お志摩さんの手になるヒトガタと星鬼権の力は実に凄まじい。あれほどの力をもってすれば攻撃に転じる隙がないわけでもないだろうに。

を突いた見事な手腕だ。結香さんの発言はただの天然ボケだろうけど、篤史さんはそんなハブニングすらも戦術に取り込んで上手く利用している。

だが、そんな小手先の技術が通じるような相手でなかったのは彼にとっては不運だった。いや、見誤った彼のミスというべきだろうか。

「いやだわ。日常会話にまで品性の下劣さがにじみ出てしまうのかしら」

と、詩紀ちゃんは指弾を真っ向から弾き返す。

「その釈明は単なる言葉遊びに過ぎず、考慮に値しません」

「確かに発言を解釈するのは聞き手ですが、誤解の可能性を十分に配慮していない発言の責任は全面的に発言者にあります」

宮藤の初さん終さんは感情に影響されず理路整然と反撃。

「いいから脱げ。話はそれからだ」

「しばし待て、赤帯レンズのフルサイズ一眼持ってくる」

「そ・れ・だ！」

がしっ、と腕を組むリン・ベンはさらに目がイッチャっていた。なにこれ怖い。

その後の彼女たちは、数を頼んで言いたい放題。減多に隙を見せない篤史さんに対して、冷蔵庫に隠しておいたシェークリームを食べた数だの、寮の洗濯物の出し方だの、当初の話題とは大して関係のなさそうな細々した恨み辛み苦情の数々が降り注ぐ。相手の理屈を無視して感情論を振りかざし、しかも感情を理屈で補強できるのだから、とかく頭のいい女子は恐ろしい。結香さんとは言えば、みんな何をそんなに興奮しているのかなと不思議そうに首をかしげるばかりで弁護人としては全く無力。

おかし。

樞はもともと詩紀ちゃんに憑いている。刺激で樞を目覚めさせてしまいうリスクこそあるが、彼女がその気になればいつでも奪い返せたはずだ。なぜかそれが出来ていない。クイズの時ドリフトが起らなかったのと同様、詩紀ちゃん能力を制限するような細工がこの場にどここされているためと七夏は解釈していたが、もしかするとずっと勘違いしていたのではないか。

そして確信する。

詩紀ちゃんだ。

彼女は自分自身のためのドリフトを抑制し、一方で樞の奪還に回すべき力を割いてまで参列者の被害をガードしている。それも無意識の間に。さもなくば樞の触手の出現だけでも大多数の参列者を発狂させるに十分だったはずだ。

あの詩紀ちゃんが、か。彼女も確実に成長していると知って、嬉しくなってきた。

それに、篤史さんもだ。

「ナナ、何がおかし！ 真面目にやれ！」

「篤史さんこそ。これが笑わずにいられますか」

七夏がすべての防御術式を停止する。それに呼応したかのようになり、樞の触手からの攻撃がびたりと止む。

結香さんが完全に人の姿に戻ったのを確認し、二組の双子も手を止める。

「ん、なぜだ？ なぜ言うことを聞かない！」

篤史さんは叱咤するが、萎れて人工芝の上にとぐろを巻いた触手はどれ一つとして動こうとしない。

「本当は誰も傷つけないとは思ってないからですよ」

今の篤史さんはすべてを捨てて掛かっている。一度実力で打ちのめしてからでないと、話し合いにもならない。

「樞の制御を奪い返すわ。防御をお願い」

つまり正攻法だ。

詩紀ちゃんにしてみれば樞はいつ何時取り込まれるかわからない危険な相手であるから、彼女は常に刺激しないようにと努めている。それを篤史さんとの間で綱引きしようというのだ。下手をうって覚醒させればどれほどの規模の破壊が起こるかわからないが、ここは彼女に賭けるしかない。

六種の攻撃属性は、七夏が中心となって呪術で抑制する。先ほどのまでの攻防で精神力をかなり消耗しているのと、篤史さんの扱う樞の全力がどのぐらいになるのかが分からない（少なくとも七夏の術以下って事はないだろう）のが問題だが。

篤史さんの気を逸らして詩紀ちゃんを援護するには攻撃も行いたいところだが、北落師門は強力すぎて問題外。篤史さんと、スタジアムの半分と参列者、近くの街の二つ三つと山一つぐらいはまとめて消し去ってしまうだろう。これは最後の手段だ。

あとは肉薄しての攻撃あるいは狙撃だが、オールレンジ対応可能な結香さんに守られた篤史さんに守られている以上、容易い話ではない。しかも、下手に制御を失わせては樞の暴走の原因になりかねない。薄氷を踏むようなぎりぎりのせめぎ合いになるだろう。

十年前は新川老や市川翁が現役でお志摩さんも健在だったが、今回は詩紀ちゃんを中心になって收拾せねばならない。まさに宗家候補に相応しい試験と言えた。皮肉なものだ。

「……なんとかしないとね」

やはり触らぬ女子に祟りなし。篤史さんには申し訳ないが下手に動いて流れ弾を受けてもばかばかしいと、七夏は頭を引っ込めてくわばらくわばら雷雲の通過を待ったものだった。

浴びせかけられた悪態の詳細については彼があまにも気の毒なので自分の心の内にとどめるだけにしているが、いかに幼なじみの間柄であってもちょっとどうよ？とドン引きするぐらいだったとだけ表現しておく。むしろ、そこまで酷い扱いを受けても軽く笑い飛ばしてしまう篤史さんは、詩紀ちゃんの言には反するが、人間が相当に大きいのではないかと思えた。このエピソードを紹介したのはそういう意味だ。

だからこそ、現に目の前で起こっている事が信じられない。だがもう少し、時系列に沿った説明がいきそうだ。

珠坂に戻ってばかりの頃。大きな事件を通じて詩紀ちゃんへの気持ちを見直した七夏が、彼女の重すぎる想いを受け止めることを決意した後。

篤史さんの部屋で、結香さんを交えて少しだけ話し合った事がある。詩紀ちゃんの隣を歩くというのがどういう事か。その覚悟を問われ、百点ではないにせよ篤史さんが満足いく答えは返せなかったと思う。

逆に、篤史さんが詩紀ちゃんをどう思っているか。そう尋ね返してみた。物心ついた頃からの義理の兄妹という不思議な距離感はどういうものなのか。幼い子供の頃も、再会した今でも、彼らの関係をうまく捉えかねていたからだ。

明瞭な答えを期待した問いかけではなかったが、彼の答えは簡

「どうやって？」

「根性、かしら」

「同感」

いつも合理的な宮藤の双子が力業の精神論という結論に達している。

「肉体言語で説得するから、ペンペン達は援護お願い」

「了解」

三人が援護してリンリンを突入させるつもりなのだろう。

「詩紀いいいい！！」

「兄さあああん！」

篤史さんと詩紀ちゃんの間で凄まじいまでの気合いが交差し、樞の主導権を奪い合う。

六本の触手からほとぼしる光線、電撃、炎、衝撃波、大岩、刃。七夏は五行を拡張した六種の術式を同時に展開し、可能な限り迎撃する。属性の相克を利用しても捕捉できた一部を打ち消すのがギリギリでだが、やらないよりはマシだろう。

二組の双子が突入するが、全身を動的に武器防具に変えて篤史さんを守る結香さんをなかなか突破できない。

この状況に至っても、スタジアムを包囲して居るであろうクロヒメ達はまだ動き出さない。七夏達が状況を收拾することに期待してくれているのだろう。彼女たちが諦めてご破算に動き始めないうちに決着をつけねばならないが、いつまで待ってくれるものか。気がかりが焦る。

こんな事を続けていては七夏の精神力が最初に尽きる。そうなれば雪崩れるように敗北が決定するだろう。

「貧弱貧弱！ 無駄、無駄、無駄あー！」

潔かつ明瞭であった。

「命を賭けてでも守らねばならないもの、だな。斗流の一員としても、義理の兄としても」

彼の立場としては、百点満点の解答であったろう。しかし感情面については注意深く排除されており、それ以上の問いかけを封じる意志も感じられた。

じゃあ、私は？ と結香さんが問うと、

「命を賭けて守らねばならなかったもの。一生背負うべき罪の証」

分かったような分からないような抽象的な答えに、結香さんは、ふーん、と気の入らない返事に続き、

「よく分からないけど、それって大切なの？」

と、さらに問うた。

「大切だ」

「えへへ」

結香さんは満足げだったが、たった一言によってお手軽に喚起された童女のような屈託のない笑顔に、なぜか七夏は薄ら寒さを覚えたものだ。理由はわからないが、これ以上深入りすべきではないと感じた。忙しさ以外に、篤史さん達の事情の把握を先送りにした理由があったとすれば、きっとこれだろう。事情を知るのであるうさおりさんや十悟兄さん達が何も語ろうとしないこともまた、七夏が知るべきではない事を意味していると考えていた。

だが、この時の七夏の選択はきつと間違っていたのだらう。斗流宗家の隣を歩くものには、感情を廃して行動せねばならないと気がある。篤史さんは短いやりとりの中で七夏にそれを教えたかったのではないか。知っても解決できないことを知る責任から逃げるな、と。斗流宗家の許婚の名をもって問えば、彼はすべてを

語ってくれたのではないかと。

あの日の詩紀ちゃんには確かに歩み寄ってくれた。知ってもただ受け入れるしかない事実をこれ以上はない形ではっきりと七夏の目の前に叩き付け、選択を迫った。この原罪を背負って共に歩けるか、と。まったく、無茶ばかり要求する似たもの義兄妹だ。

ならば、この時七夏がもう一つの問いを発することが出来たら、現状は変わったのだろうか。

歴史の変動を見通す尚書の星鬼の祝福あるいは呪いを受けた竜胆大輔なら、何かのヒントをくれるだろうか。彼の相棒の睡蓮さんや玲韻さんに頼んだならば、あるいは詩紀ちゃんに頼めば、やり直しは可能だろうか。いや、協力はしてくれようが、あれらはそこまで使い勝手のいい力ではないだろうし、個人的後悔の精算などに巻き込んで気を使わせるのも悪い。いや、人を使う立場にある者は冷徹であるべきだ。単純に割に合わない取り引きだ。彼らに負担をかけるべき時は今ではない。

所詮は人の心の問題でしかない。何も致命的なことは起こっていない。過去をやり直さずとも、今ここで決着をつけられる問題だ。我々は言葉を持った人間なのだからと。反則技での解決の可能性を無視し、七夏は心を前に向けなおした。しかし、これもまた間違いであることに後に気づく事になるのだが。

儀式まで約一週間という限られた時間を使い、七夏は調べられるだけのことを調べることにした。

さおりさんや十悟さんから事情を聞き出すことも考えたが、彼の口から語られる言葉は彼らの言葉でしかないし、核心をその

篤史さんが指を鳴らすと、彼を取り巻くように地面が六カ所で盛り上がり始める。

ドームの屋上に届きそうな高さの、塔のような何かが人工芝を貫いて立った。根本の直径は一抱えでは足りないだろう。

絵の具を洗った後のような何とも言えない色合いの水で形成されたそれは、次の瞬間ぐにやりと曲がって鎌首をもたげる。それではじめて、それらが巨大な触手である事が理解できた。

表面には小ささまざまな吸盤が並んでいる。吸盤に根本に柄のあるもの、無いもの、縁に小さな牙が並んでいるもの、中心に大きな爪が生えているものなど、統一感がない。一見すると頭足類のそれに近いが、吸盤の配列や太さの異常なバランスは不安感を喚起させ、とても世の常の生き物の一部とは思えない。それらの放つ瘴気としか言いようがない何か、魂に直に脅威を伝えてくる。

観客席のバケモノ達の一部がイアイアとか嫌な感じの歓声を上げていているが、精神防壁の訓練を受けている斗流の間はともかく、一般人の正気度がどのぐらい保つのが気になるところだ。陣のフィルタリングはアテになるのだろうか。

まあ、そこらへんはさおりさんや黒男さんや十悟さんあたりが上手いこと処理してくれるだろう。直接対峙する七夏達はそれどころではない。

「俺は人間をやめるぞ、詩紀！」

ことこの状況に至って無意識にネタを口走る篤史さん。業が深い。

そのズボンの裾が裂け、隙間から滑り出た何かが地面に潜り込んでいるのが見える。過去の苦い経験を生かし、樞の招来に下半

まま伝えてくれるほど甘い人たちではない。現状では権威をもって迫ることも困難だ。客観的事実と推理をもって仮説を武器となしておいて逃げ道を確実に塞がねば、間違いなくかわされる。

何をやるにしても、まずは事実の調査だ。一つだけ明らかなことがある。篤史さんを知るなら、詩紀ちゃんを、そして結香さんを知ることだ。

今更と言えば今更だが、まずは公式記録。役所をあたる事にした。

「突然ですが、ちょっとした過去の悪事を告白します」

本当に突然だった。

堂々と二人で学校を公欠して市役所に向かうバスの中、詩紀ちゃん（美紀ちゃんの方）がそんな事を宣わった。

「いえ、こういう場合は激白とか言うのかしら」

「は？」

大抵は全然激っぽくない時に限って使われる言葉なので、かえって強調の意味が乏しく軽薄にも感じられるのだが。

「ナナが本気になって調査を始めたなら、知られてしまうのも時間の問題だし。思い切ってぶっちゃける事にしたわ」

自分を納得させようとするかのように何度も頷きつつ、詩紀と美紀を行き来しながら、らしからぬ言葉数を紡ぎ出す。

「話しそうな人の口を片っ端から封じて回るのも面倒だし。言ってしまった方が手っ取り早いよ。王様の耳はロバの耳。言うは一生の罪、言わざるは一生の面倒と言おうでしょう」

あんまり言わないと思う。

「僕は神父さんでも牧師さんでもないんだけどね」

身だけを使ったのだろう。おそらく彼はその場を動けないが、そんなものがどれほどのハンデになるとも思えない。

集まる視線に、詩紀ちゃんが無言で頷く。あれが樞の力の発動だというのは間違いなさそうだ。七夏の術でも、詩紀ちゃんの中の星鬼の魂が活性化しているのが確認できる。が、そんな方法で確認するまでもない。

触手の一本が先端に雷をまとい、別の一本が先端に炎をまとい、また別の一本が先端に光球を宿す。結香さんの髪のように刃状に変じるものもある。

本体までは実体化していないが、間接的に他の北斗七鬼の力を引き出しているのだから、北斗の頭たる樞に間違いはない。

「手始めに、お客人達にちょっと怖い目にあっていたらどうか。それで俺の力は納得してもらえるだろうしな」

触手の一本よりレフトスタンドに向けて紫電が逆り、爆発を起す。悲鳴と怒号が上がる。

「ん？ 意外に丈夫だな。ちょっと手加減しすぎたか？ いや、ちょうど良いか」

スタンドの壁は崩れたが、客席に被害はなさそうだった。客席の防壁力が意外に健闘しているのは嬉しい誤算だ。さすがお志摩さん印。

「おう、詩紀にナナ。こんな事をやる人間に宗家の座を与えておいて良いのか？ ーん？」

篤史さんは挑発的に右手をおおぎ、手招きしてみせる。

彼にしてみれば、全力の詩紀ちゃんを圧倒しないと勝ったことにならないのだろう。

「次は何十人が死ぬぞ」

と、篤史さんは肩をすくめる。

「俺は一度大負けして、高価すぎる代償を支払ってしまった。宗家になったから取り戻せるものじゃないが、ゆっかが守ってくれようとしたブライドを少しぐらいは回収したいじゃないか。あいつが無駄死にできなかった事の証明になるかは分からないけどな」

「それが篤史さんの誠意なんですね」

「ただのこだわりだ。ばかばかしい話さ。笑いたければ好きに笑ってくれ」

七夏なりの解釈に、篤史さんは自嘲的な笑いを返す。

「それ、全然笑えませんよ」

「兄さんの考えは概ね理解したわ。到底納得出来るものではないけれどね」

それなら自分がリセットしてやろう、とか言い出さないのは詩紀ちゃんなりの優しさなのだろう。

「で、あれはやっぱりお志摩さんの仕業なの？」

「ああ、高位の鬼を憑かせて使役するためのヒトガタだよ。矢車の倉にあったそうだ。自分がゆっかだなんて言い出したのは、何もかも無かったことにしたいっていう俺の弱い心の反映なんだろうな。くそ、情けないぜ」

……

篤史さんの言葉を脳内で反芻する。

……！

何と言うことだろうか。

この人は馬鹿だ。大馬鹿者だ。察しが悪いにもほどがある。

「リンペン、初終！ とにかく手を貸さない！ このバカ兄貴

「懺悔でも告解でもないわ。どこの神様に許してもらおうとも想わないし、ナナ以外の誰がどう思おうと知った事じゃない。ナナ以外の誰も罪に問えないのだから、ナナ以外の誰が許せるわけでもないのよ」

そこまで言ってもらえるのは光栄の至りだが、いくらなんでも責任重大すぎる。

「それ、僕が詩紀ちゃんを許せなかったらどうするの」

「絶対に許さない。絶対にだ」

尋ねた自分が馬鹿でした。

「それにナナを見誤ってた自分も許せないわね」

それは怖い。

彼女を落ち込ませるのはこの町、いや国にとっても危険すぎるし、七夏個人としても本意ではない。でも、こと七夏の精神状態の把握に関しては嘘など通用する相手ではないのだ。

「笑って許せるぐらいの内容であることを心底願うよ」

なにしろ、感情なんてなるようにしかならない。表面的な発露を抑えることは出来ても、感情そのものを偽ることは困難だ。ならば七夏に出来ることは、願ったり祈ったりぐらいしかない。

「私も……産みの両親を、殺したの」

いきなりだった。前振りも、心の準備をする間もなければ、言訳の要素もなかった。

でも良かった。これなら大丈夫。

「許す」

七夏を不安げに見つめていた董色の目が、次第に据わってくるのが分かった。美人だけに大迫力。

「……どうして、なんでそんな簡単に許しちゃってるの？」

を止めるわよ！

詩紀ちゃんも同じ思いなのだろう。

「いえ、でも私たちは今は篤史さんの……」

「チームメイト」

状況を理解しきれていない初さんとペンペンを、七夏は怒鳴りつけた。

「心で違いの思いこみで斗流の敵になろうとしてる幼なじみを、僕らが止めなくて誰が止めるんだよっ！」

「はっ、はいっ！」

「……了解した。お手向かいさせていただきますぞ、篤史ちゃん」

その様子を見て、肩を振るわせて笑う篤史さん。

「説得による敵戦力の取り込みか。確かにルール範囲内だ。普通ならギブアップを宣言するところだろうな」

「これで六対二です。ここは武器を引いて、腹を割って話し合いと行きませんか」

「甘いと言ったろう。俺は斗流どころか人類の敵になることも辞さないつもりなんだ」

「……マジ？」

勘の良いリンペンが身震いする。

「今ならうまくやれるかもしれない気がしないでもないような、そうでもないようでもあるしな」

「こらー、そんな適当な根拠で無茶すんなー！」

リンリンの抗議を意に介さず。篤史さんは右手を高々と差し上げる。

「詩紀、お前が真に宗家の器だと言うのなら見事この俺を止めてみせろ！ 来おいっ！ 樞うううっ！」

なんで怒られるのだろうか？

「許してもらえろと思ってたんじゃないの？」

「許してもらえなきゃ困ると思ってたのよ」

「なるほど」

「なるほどじゃないっ！」

当然のように説明を要求された。

感情に理由の説明が必要なかなあとと思うが、無理を承知であえて言葉への翻訳を試みる。

「好んでそんなことをできるような人間を、こんなに好きになれるはずがない、ってところかな」

「卑怯者！ 女たらし！」

一瞬で沸騰した詩紀ちゃんに、真っ赤な顔で怒鳴られた。

いや、今の台詞は二人分だった気がする。

「……そういえば、こういう事真顔で言う男だった。緊張のあまり油断していたわ」

語義的には緊張のために油断して自己矛盾してる気がするけど、言わんとすることはなんとなく分かる。

「僕やリンペンのご両親の事故と同じでしょ？ 不可抗力なら詩紀ちゃんの責任じゃない」

七夏が物心ついた頃には、新川兄妹はすでに一緒だった。

彼女（達）がいつ樞に憑かれたのかは分からないが、二歳や三歳の少女が正攻法で大人をどうこうできるはずがない。ならば、超自然的な力が介在している事は間違いないだろう。

北斗七鬼の頭である樞の魂は彼女の身体に憑いてはいるが、詩紀・美紀の双子の魂の意志によって抑えられ、辛うじて休眠状態を保っているというのは以前にさおりさんから聞かされているし、

七夏自身も確認している。宮藤の双子がそれぞれの片腕に振り分ける形で強大な北落師門の星鬼を宿しているのも、おそらくは同様の理屈なのだろう。彼女たちが長手袋と双子の独立性をもって北落師門の暴走を封じているのと同様、樞の猛威が抑えられているのも危ういバランスの上でしかないのだ。

詩紀ちゃんの精神が樞の巫女としての役割を果たせるレベルまで成長したことで、十年前の事件は起こった。成長とは変化であり、既存のバランスを崩すこともあるからだ。ならば、人生において最大の成長にして変動とは、誕生のその時ではないか。

という推理を語ると、

「ご明察。さすがね。ナナに隠し事なんて出来る気がしないわ」
淡々と褒められてしまった。だが、詩紀ちゃんの表情はとても褒めているようなそれではない。

「あの時、私の中の樞は目覚めていたの。いえ、私達が樞の一部だったとでも言うべきかしら」

母体より生命体としての独立を果たしたその瞬間、身体の本래の主である双子の未熟すぎる精神が無防備に暴露されるようになった。その事により、樞の精魂が双子の精魂を上書きするように精神・身体を支配する事が出来たのだろう。十分あり得る話だ。新生児の肉体を採ったところでそれだけで物理的に何が出来るわけでもないが、不十分とはいえ身体を得ているということは現人神としての干渉能力を備えていることを意味する。

「さすがに記憶は不鮮明だけれど、感情だけはね、はっきりと残っているのよ。父親が私の首に手をかけた時の。こんなところで死んでたまるか、殺されてなるものかって」

詩紀ちゃんは両拳を握りしめ、血がにじむほどにぎりぎり歯

結香さんとその家族はそのダム事故で行方不明となり、死亡認定された事になっている。

「あの原因は手抜き工事なんかじゃない。俺が樞の制御に失敗したんだよ」

あんどすと？

完全に予想外のとんでもないことを言い出した。

「樞に乗っ取られた俺が何もかも喰っちゃまったんだ。ダムも、ゆっかも、家族も。バクンバリバリってな」

冗談……ではなさそうだ。

彼の発言が真実ならば、七夏と詩紀ちゃんの立てたいずれの仮説にも含まれない予想外のファクターだ。あまりにもあり得ないため、無意識に可能性を排除してしまっていたかもしれない。使えない、わけではないのだから。

確かに樞は詩紀ちゃんに憑いているが……他の何者かによって使役されている最中でさえなければ、フリーの鬼の固有能力は才能のあるものなら誰にでも引き出せる。それと同様に、憑いていても眠っている鬼を使うのはフリーの鬼を使うのと大差ないはずだ。

ただし、扱いきれるかどうかは全く別問題。樞は現時点では眠っているが、それでお詩紀ちゃん達にあれだけのドリフト能力を与えるほどの恐ろしく強大な鬼だ。斗流の歴史上で樞憑きは詩紀美紀を含めてわずかに三組六名に過ぎず、樞固有の能力まで使いこなせた者は居ない。

そんなものを暴走させつつも篤史さんは生き残っている。その事実が、彼の卓越した才能を示しているとも言えないだろうか。

「なんで、そんなことを？ 何のために？」

を鳴らす。あたかも感情を反芻するかのように。

防衛本能から怒り・攻撃衝動への転化。遠い過去の出来事であっても、純粋な負の感情を冷静なままに思い返すことは困難なのだろう。

「だから、私が、私の意志で、やったの」

直接の原因は、酸素ボンベの破裂だと言う。

偶然を制御するのは鬼神の得意技だ。巫女として未成熟であっても、信仰を束ねる陣のサポートがなくなるとも、病院という場所には怨嗟と呪いが渦巻いている。それを利用すれば人間の一人や二人消し去る程度のこととは可能だろう。

斗流の末席に籍を置いていた彼女の両親は、賢明にも彼女に宿るものの正体とその危険性を正しく察知し、自分たちの娘ごと抹殺しようと図った。人間としてはともかく、斗流の一員の行動としては理解できるものだ。

鬼憑きの兆候は胎児の頃からあったに違いない。その時点でしかるべき筋の指示を仰いで対処にあたっていれば、きっと話は違っていたのだろう。できれば間違いであって欲しい、きつと何かの間違いだ、という希望的観測。受け入れがたい事実を受け入れるにあたって葛藤があったのは人の親として当然だ。しかし、結果としてその躊躇が命取りになった。

実際、事件は発生直後に收拾された。先代の宗家の新川喜一老（篤史さんのお爺さんだ）や、新川に第一位を譲ったとはいえ未だ実力に衰えの無かった老川翁、それに芳村のお志摩さんらが現場に乗り込み、彼らの命脈をもって樞にさらなる封印を重ねたのだと言う。であったからこそ、老川翁が亡くなり封印が弱まった事が十年前の事件の一つの原因となりえたのだが。

問う声が震えるのが七夏自身にも分かった。

「好きこのんでこんなものを使おうだなんて、どうかしてるとしか言えないわね」

お世辞にも豊かとは言えない胸に手を当て、詩紀ちゃんが眉をひそめる。心底理解できない、といった表情だ。

「……お前らには本当に分からないんだな。羨ましいよ」

篤史さんは両手を広げ、ぐるりと一回転して観客席を示す。

「ほとんどの人は分かってくれるだろうな。身に覚えもない事で慰められる屈辱感ってやつを」

ばらばらと聞こえる拍手、「分かるぞー」の声。

「斗流を継ぐことになって興味なかったし、才能のある詩紀が継ぐのが当然だと思ってた。でもな、俺はいつもこう言われ続けてたんだよ。『この馬の骨ともしれない義理の妹の下につかされるなんて気の毒に』『悔しいだろうが我慢してくれ』『斗流の未来のため屈辱に耐えてくれ』ってな。」

「そんな小さな人間だと思われていた、そっちの方がよっぽど屈辱だった。でもそれ以上に我慢ならなかったのが、ゆっかに対する態度だったよ。」

「結香ちゃんもいつまでも篤史君にくっついてると損するぞ」
って言われたあいつが懸命に反論しているのを見た時、ゆっかに感謝すると同時に自分の情けなさに腹が立った」

えへへ、と頭を掻き、結香さんは子供っぽく照れる。

「尊敬されるに値する人間であることを証明しなきゃならなかった。俺を支持してくれるゆっかと、それにおじさんおばさんに見せるため、ダム湖で樞の一部なりと招来してみせようとした。その結果がこのざまだ」

リンペンが、そして初さん終さんが、固まっている。まさに殺し合いの最中だった筈なのに、友人の死を意識させる光景に冷静ではいらなかったか。

いや、彼女たちを含めた誰も彼もが、理解を超えた奇妙な出来事に目を奪われているのだ。冷静なのは七夏と詩紀ちゃん、そして篤史さんにさおりさんぐらいのものだ。

血が流れないぐらいは想定していたが……人工芝上に散ったそれは、切り裂かれた紫城学園の制服をまとったものは、到底人体などではあり得なかった。たえて言うなら陶製のデッサン人形目鼻もなければ髪も爪もない。

しかも、バラバラになつてはいても破損はない。いかに神世の名剣と戦神の剣撃といえども、斬撃にともなう手応えがなさ過ぎだった。まるで空を切っているような感触だった。

トカゲやカニの自切と同じだ。神剣で切断される直前に接合部を分離し、刃をすり抜けることで破壊を免れたに違いない。

「ばらけてる場合じゃないぞ、ゆっか！」

篤史さんの叱咤に応え、人形の各パーツが宙を舞って整列、再び人型に接合される。そして瞬き一つの後には結香さんの姿を取り戻す。先ほどからの出来事を見ていなければ、まるっきり人間にしか見えない。

「あーっ、なんで？ ノースリーブのミニになつてる！」

中身もいつもの結香さんだった。緊迫したシーンだというのに一瞬気が抜けそうになる。

「ターンX？ ……個人の感想です。斗流としての公式見解を示すものではありません」

意外と余裕なのか、こんな事を口走るほど動揺してるのか、相

以上は詩紀ちゃんの記憶と知識、七夏の限られた知識、そして公開された情報からの推定だが、おそらくは真実から大きく外れてはいないだろうと確信している。

「それでも不可抗力は不可抗力だよ。たとえ不可抗力でなくても、詩紀ちゃんを責める気にはなれないけどね」

生物が本能に従って身を守るのは当然だ。例えば相手が自分の親でも、その目的が世界全体のためであっても。自分の命を脅かすものがあるなら、排除しようとするのは正当防衛だろう。それを非難する資格など誰にもない。

七夏の発言が本気かどうか、見極めんとするかのように詩紀ちゃんが視線をぶつけてくる。ぶしつけに、遠慮無く。そして真摯に容赦なく。

「よろしい。合格よ。許してあげる」

そして見事なまでの上から目線だ。

まあ、それでこそ詩紀ちゃんなのだが。

精神によって補強されていないむき出しの魂が、強大な樞の魂と同居しているわけであるから、その影響は不可避だ。詩紀ちゃんは魔王の名代としての個性を率先して身につける手段を選択することで、逆説的に致命的な汚染を回避する術とした。彼女が期せずして人間性の防波堤として働いたことで、双子の片割れである美紀ちゃんは人間としての自覚を保つことが出来たのだとも言える。

確かに上手い適応手段だが、それなりの副作用もある。偽悪的な詩紀ちゃんは、ちよくちよくこうして七夏の反応を試してくる無理にでも現状の肯定を得ることで、魔王の影響を受けた自分の居場所を人の住む世界の内に確保し続けたいという渴望の為せる

変わらずリンペンは読めない。

それより。

「篤史さん。説明してもらえますか」

「ん、何の事だ？」

篤史さんは鼻で笑った。少なくとも彼の態度には全く動揺がないが、ここが勝負所とさらに揺さぶりを掛ける。

「そんな姿になった結香さんをそばに置いているのは、篤史さんが彼女の死に責任を感じているからですか」

「今更斗流宗家の座にこだわっているのもね」

七夏の意志をくみ取り、詩紀ちゃんも畳み掛ける。

「聞かせてください。十年前、彼女に何があつたんです」

「内容の如何によつては、宗家の座を譲ることもやぶさかではないのだけれど」

「力を合わせて斗流を担うべき僕らが、お飾りの指揮官を決めるためだけに本気で殺し合う必要があるとは思えない」

七夏達の説得を真剣な表情で聞いていた篤史さんだったが、

「ふっふっふっふ、はっはっはっは」

と乾いた笑い声を上げ、

「甘い、甘いぞ。だからお前らはアホなんだ。なっちゃあいない、本当になっちゃいないな！」

と、白い歯を剥き出しにて哄笑する。

「いいだろう。聞かせてやるよ、俺の罪を。十年前の赤ヶ谷第一ダム崩壊、覚えてるか？」

質が悪いコンクリートで建設された古いダムが水圧に耐えかねて自己崩壊し、河川敷にいた数十人が急な増水に巻き込まれて亡くなった事件があつた。

業なのだろうだ。すなわち、彼女が心の平穏を保つためにはどうしても必要な儀式なのだ。

いちいち相手にするのが面倒でないとは言わないが、自分だけには甘えを見せてくれる証左と思えば、その面倒さもまた嬉しくも誇らしくも感じられる。

「そりゃ光栄」

駅前バスを降り、すぐ向かいの市役所にお邪魔する。

ほんの三年ほど前に立て替えられたばかりのピカピカの建物で、いかにもハイカラ（超死語）な外観。パリアフリーを考慮してだろう、正面玄関の階段脇にはスロープも造りつけられている。ただ、そこまで配慮している割には、見栄え優先のつややかなタイルを使っているのには感心しない。幸い今日は雪はないし地面は乾燥しているが、天候によつてはじいちゃんばあちゃんには危険かも、と思つたが口にはしないでおく。

「滑りそうね」

言っちゃうし。

「篤史さんたち、受験生なんだけど」

「どうせみんな珠大の推薦枠じゃない」

詩紀ちゃんの言もいちいちごもつともものではあるが、言霊使いの端くれとしては不用意に迂闊なことを口にするのには抵抗があるのだ。

役所の中に入ってみれば、最近の建築の例に漏れずガラス張りとか吹き抜けを多用しているため外光が多く取り込まれるようになっており、こういう施設につきものの堅苦しさの少ない明るい印象を醸し出している。だが、とにかく人が少ないためどうにも

気怠げな印象だ。

「もしもし」

入り口の右手側、人形のように不動を保っている案内係のお姉さんに声をかける。

「！」

頭上の案内板には今風にコンシェルジュとか書いてあるが、これもお年寄りには絶対分らないなあ、なんて余計なことを考えられるほどの間があつて、

「はい。本日はどのような目的でご来店でしょうか」

型のごとき台詞。声色は落ち着き払っている。役所の最前線だけにおかしな客も多いだろうし、いちいち動揺はしてられないのだろう。

「あの、戸籍係ってどちらですか？」

「戸籍係でしたら、そちらの階段を上って二階正面、市民課の三番窓口です」

「二階ですね。ありがとうございます」

「どういたしまして」

その後のやり取りは至ってスムーズだった。

確かに反応の遅れはあったが、ド派手な詩紀ちゃん連れだという事を考えれば驚くには値しない。むしろ我に返るのは早かった方ではなからうか。さすがにプロといったところだ。

当の戸籍係で書類閲覧の申請を行うと、

「そちらの椅子にお掛けになって、しばらくお待ちください」

担当職員（まじめが取り得、って感じの気の弱そうなお兄さんだった）は窓口の端末をかちかちややっていたが、やがて申請書を持って奥のコンピュータメントへと姿を消してしまった。

まあ、これは完全に横車の部類なので、素直に教えてもらえるとは思っていない。

呪歌でもって一時的に聴力をブーストしてみる。まもなく、先ほどの職員の声を探し当てて成功した。

「これっていつぞや教わった特例甲ですよ？ 気づかなかったフリして出しちゃえばいいんですよ？」

「特例甲？ んなものがそうあるかっての……」

もう一人、上司か先輩らしい別の声が質問に答える。

「ってマジかよ……しかも特例乙じゃねえか！」

「え？ 遠野って家も、そうなんですか？」

「お前はまだ短いからな。とにかく、これM裁量な。そっちの方は俺が話つけとくから、お客を応接室までご案内して差し上げろ。あと、もう一人の名前もちゃんと伺っとけよ。とにかく、くれぐれも失礼の無いように。機嫌を損ねたら例えじゃなしに首が飛ぶぞ」

「ってまたまたあ。綺麗な女の子二人組なんですけど」

「覚えとけ。綺麗な薔薇には猛毒があるもんだ」

「トゲでしょトゲ」

聞こえていないことを承知でツッコミを入れてしまった。詩紀ちゃんのことを言ってるのだとすれば、間違ってるのに的確すぎる形容だ。

男なんだけど、ってツッコミの方が優先順位が低いのが我ながら悲しい。

「上手いこと言うわ。ナナってまさにそんな感じだし」

自覚皆無ですか。

しかもブーストなしで聞けるとか。しりりんイヤーは地獄耳。

という差はあるが、多少身体能力がブーストされている程度では決定的な差にはならない。付け焼き刃の七夏と純正の鬼斬りの篤史さんでは戦士としての格が違いすぎる。そもそも技術とは能力で勝る相手を倒すために磨き上げられた体系だ。生まれた時から不連続の修行によって磨き上げられ完成の域に至った熟練の重みは、そう簡単に覆せるものではない。

であるからして。こと戦闘に関しては、七夏の意図など元より察知されていると見て良いだろう。暴風神の神速をもつとしても、素直に結香さんの元にたどり着かせてはもらえなかったはずだ。

しかし七夏は一人で戦っているわけではない。七夏に先んじて一步を踏み出した篤史さんが踏みとどまる。その鼻先を、赤熱した金属板が通り過ぎる。

詩紀ちゃんが放ったコインだ。篤史さんと同じ、衝を降ろしての電磁誘導砲。

いかに篤史さんが衝を使うことを得意としていても、四六時中降ろしっぱなしにするのは消耗が激しすぎて非現実的だ。個々の鬼を使うのに資格があるわけではないし、斗流の血の出た者なら扱えるかどうかはともかく降ろす事は可能だ。これまで必要を感じなかったというだけで、詩紀ちゃんなら使いこなせて当然。篤史さんの指揮で結香さんが激変するように、七夏と詩紀ちゃんにもこの程度の連携は打ち合わせなしに出来る。

篤史さんが今度こそ焦りの表情を浮かべる。

これならいけるかもしれない。

彼を倒してからすべてをリセットしてもらっても、やってもいない勝負の結果を聞かされた彼が納得するとは思えない。宗家が詩紀ちゃんに決定しても篤史さんが納得しなければ禍根を残す。

ならば、リセットが必要ない範囲の被害に抑えつつ、篤史さんからギブアップを引き出すのが第一目標となる。

篤史さんを揺るがせられる可能性があるとするれば、そして七夏達の仮説が正しいとすれば、ここで狙うべきなのは結香さんだ。

篤史さんの指揮下にある結香さんを捉えるのは簡単なことではないが、隙を造ることぐらいは出来る。

アテナの盾に期待したのは髪の毛の鎌を弾ける防弾力だけではない。陽炎で造られた盾の意匠の詳細の視認までは難しいが、中央に据えられた蛇女の首も再現されており、ガタノソア級とまではいかずとも石化レベルの身体拘束能力を発揮する。北斗鬼を降ろした者を石化にまで持ち込むのは難しいが、最低でも一瞬の金縛りを生むぐらいは可能だ。

「ごめん！」

弁解にさえないらぬ謝罪が口をついて出た。恥ずかしい。ただの自己欺瞞だ。

英雄神スサノオの剣技が七夏の身体を動かす。かりそめの天羽々斬の抜き打ちの一撃で首を落としたが、これで動きを止められるとは思えない。刃に欠けのある十束の剣を一呼吸の間に十と六度振ると、分断された五体が散らばる。

怪物は殺せても、相手が人の形をしていれば手を掛けるのに罪悪感を覚えるとは勝手なものだ。鬼斬りの端くれとして自らの罪から目を逸らすことなく背負わねばならない。七夏自身の戦う力は限られたものだが、結果を見届ける事なら出来る。そしてゴーサインを出した責任を負うだけだ。

誰一人悲鳴を上げるものもないというのは流石と言わざるを得ないが、まだ理解が及んでいないのかもしれない。

人達を斬り倒しまくっていたのと同じ、結香さんの髪が変じた武器だ。

あぶない、あぶない。

正規の戦闘訓練を受けていない七夏ではどれだけ間合いをとっていても安心できないと判断し、優先して発動させた警戒用術式がぎりぎり間に合った。今日の七夏は冴えている。

「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」
「鍛冶神が打ちて霹靂の父神が姫に送りしこよなしの盾」

篤史さんの得意とする衝に対応すべく、竜退治の剣である天羽々斬を端緒に嵐と雷を司る冥界の王スサノオの権能を招来。さらに、ギリシア神話にて最高の防御力を誇るアテナの盾の加護をも加える。

想像上の神性であれ英雄であれ、あるいは人口に膾炙した伝説のマジックアイテムであれ、多数の精魂生命体によりある程度固定的なイメージを共有されているものだ。これはとりもなおさず、精魂回路の海の中に一個の単位として存在しうる事を意味し、個性としての固有の精魂回路を備えた一個の魂と同等の在り方と言える。剣の精霊にして一人の人間でもあり単体で固有能力を発動できるクロヒメたちみたいのは極端な例だが、実体のない共有幻想であっても、名と属性を媒介に回路にアクセスして仮の実体を与えてやりさえすれば、その固有術式を発動させて物質界に対する影響力を行使できる。理論的には八百万の神霊精霊を操る呪術魔術と大差ない。

信者の想像力と信仰心こそが人の域を超えた神を生みだし、神官的存在がその力を物質的恩恵として引き出す。誤解を承知で俗っぽい言い方をするならば、

その後速やかに応接室って書いてある部屋へと通された。盗み聞きした情報の通りだ。

担当の職員さん（名札によれば木内さん）は恐縮しきりで、高校生相手に下にも置かないもてなしっぷり。

出されたお菓子って知る人ぞ知る松実堂のきんつばだし、お茶の方も秘蔵のお茶っ葉に違いなかった。

「この銘柄ってもう少しまるやかさがあつた気がするのだけれど、どうしてかしら。ねえナナ、給湯室を借りて煎れなおしてみてもらえないかしら？」

これだ。

先輩に言われたとおり精一杯配慮しているのが分かるだけに、大変申し訳なく感じる。

真っ青になる木内さんを片手で押んでおき、

「十分おいしいけど。もしかしてストレスの影響じゃない？ 自分じゃ気づいていないようでも、体調は正直だったり」

「そう？ ナナが言うのならそうなのかもね」

露骨にほっとした表情を見せる木内さんが、今度は点数稼ぎに出してきた。

「ご、五ヶ瀬さんも新川さんともとお綺麗ですけど、お二人とも学校ではさぞやおもてになるんでしょうね」

なんでこの組み合わせで僕が先なのだろうか、そこが解せない。万年制服の生徒会長じゃあるまいし、との一言で押し切られてしまったが、やっぱり制服にしておくべきだった。

初対面の人に女子と間違われるのは仕方ないとしても、痛くも痒くもない腹を邪推されても危険なだけなので、言うべきことは

信仰というのにはある意味で金融システムのようなもの。しかるべきアクセス権（口座と担保）さえ用意すれば、どこの銀行からでもプールされた金を引き出せる。

七夏に憑いている九州珠口という星鬼は、魔術的マスターキーにして自動翻訳装置にしてコマンド最適化エンジンに例えられる各神話体系・魔術体系の専門術式を身につける必要もなく、ただ思いのままに声を掛ける感覚で、古今東西の神性でも英雄でも宝具でもアクセス対象にできる。自分で言うのも何だが、まともな術士に言わせればチート以外の何物でもないだろう。

陰陽師が人型の紙片を式神と為すように、七夏は五七七七七の短歌にのせた音波の縦波の干渉によって空気の密度差を織り上げ、召喚のための原型を作り出した。屈折率の差による陽炎の輪郭が辛うじて視認できるだけが、その中には召喚された干渉力が充満している。

半透明な武器と防具を手にした七夏は、スサノオの力を借りた疾風迅雷の踏み込みで結香さんに接敵をはかる。

「ちっ、汚ねえぞナナっ！ 何でもアリか!? お志摩さんかっての！」

篤史さんが舌打ちして毒づくが、毒づきたいのはむしろ七夏の方だ。なんとというプレッシャーだろうか。ここまでやってもまるで勝てる気がしない。せいぜいが詩紀ちゃんの足を引っ張らないで済む程度との認識だ。

七夏と篤史さんでは基本的な戦闘能力に雲泥の差がある。ライフルを持って人食いライオンに立ち向かうのを卑怯と言われても困るのだ。

確かにこちらは鬼憑きで、篤史さんは鬼使いの才能のある人間

言っておくことにする。

「そのような事実はありません。断じて。誰かさんにだけもてればそれで十分なので」

「そんな謙遜は必要ないわ。どうせ連れ歩いて見せびらかすのなら、モテモテの人気者の方が気持ちいいし」

「はあ、左様ですか」

彼氏ってファッションじゃないんだけどな！。

この二人ってやっぱりそういう系の関係なのか。やっぱり旧家の人たちは何か違うな、とても言いたげな目で見られてるんです。やっぱり誤解してる、木下さん。

一応誤解を解いておきたいと口を開きかけたところで、応接室の扉を乱暴に開け、壮年の紳士が飛び込んできた。

「お待ちせしました！ 市長の九條勇武でございます！」

紳士は肩で息をつきながらそう名乗ると、冬だというのに額からだらだらと汗を流しながら、深々と腰を折ってみせた。

「ん、手間をかけるわ」

こういう扱いに慣れているのだろうか、詩紀ちゃんはソファーにかけてそのまま傲然と言つてのける。

「新川・五ヶ瀬のお世継ぎ御自らお運びあそばされるとは恐縮の至り。遠慮無くお呼び付けただければ、何をおいてもこちらから参上させていただいたものを」

うわ。

いくら何でも大仰すぎる。水戸黄門やら暴れん坊将軍じゃああるまいし。

へりくだった態度もここまで極端だと暴力と大差ない。正直、いたたまれない。

こちらでも慌てて起立して頭を下げ返し、着席を促した。「頭を上げてください。わざわざ市長さんのお手を煩わせるほどの話じゃないので、かえって恐縮です」

「いえ、十家の方々のお力添えあつてのわたくしでございます。選挙へのご協力はもちろん、市政の運営においても議会対策においても、多大なご支援をいただかなければ一日としてやってはいけません」

それが全部本当ならさすがに頼りなさ過ぎる気がするが、いくらなんでもただの操り人形で務まるような立場とは思えないからかなりの謙遜が入っているだろう。だがそれはそうとして、ひとかど以上の社会的立場のある人間が学生相手にここまでするのだから、十家を相当に重視していることは間違いない。

一体どんな便宜を計らっているのか、具体的に尋ねてみたいよいうな、聞かないでおいた方がいいよいうな。法律に触れることをやっつていなければ良いのだが、おそらく、きつと、間違いなく、やっつてるだろうな。

「で、情報の方は教えてもらえるのでしょうか？」

挨拶もそこそこの詩紀ちゃんの単刀直入な質問に、市長さんはらしからぬ花柄のハンカチ（奥さんの趣味かな？）で汗を拭き拭き、口を濁す。

「それが……なんと言うか、大変申し訳ないのですが」

と、先ほどの滑舌が嘘のように、要領を得ない。

「御宗家の御命令というのならばともかく、たとえ十家の方のお申し入れでも、他の十家の情報をこちらの一存では開示いたしかねまして」

一般人の情報なら教えてくれるんだ、と突っ込むのも気の毒か。

扉に突っ込んだりしていたものだが、まさか改良して実戦に使っつてこようとは。

互いに無手、遠距離攻撃はないと油断させておいてこれだ。高度の物理防御力を備えたリンリンを撃ち抜くことは困難でも、ライフル弾以上のエネルギーを与えられたコインを立て続けにぶつけられては速度を殺されるはずだ。対物ライフルを手にしたペンペンが、憑いた星鬼『弧矢』の力を上乗せすればリンリンの防御さえ抜けるだろう。開幕直後にリーダー自らが部下をサポートすることでバランスを崩すという作戦だ。

だが、リンリンはいっそう加速し、ペンペンに向かって突っ込んでいく。七夏が開幕直後に発動させた電磁波攪乱術式が、衝のリーダー機能の位置速度測定精度を低下させ、結果として本来は必中になるはずの攻撃の空振りを誘ったわけだ。ペンペンは対物ライフルを構える間を与えてもらえず、せっかくの武器を拳を受けるための盾にせざるを得なかった。

しかし、そのままペンペンを倒してしまふかと思われたリンリンが一步後退する、いや、させられる。ライフルにくくりつけてあった対地雷が炸裂し、至近距離から多数のペアリングをまともに叩き付けられたのだ。単純な物理的な衝撃では『斧鉞』の防御陣を破ることは出来なかったが、リンリンを押し返すことで、続けざまに投下された二丁目の対物ライフルを受け取るための貴重な一瞬を稼ぎ出したのだ。畏と予備武器まで用意してあるとはなんたる周到っぷりと感心するほか無いが、それでもあの距離での戦いでは近接戦闘特化型のリンリンに分があると思いたい。あとは彼女に任せるしかない。

一方、終さんと姉の初さんは引き合うかのように距離を詰めて

彼にしてみれば、対立している複数の上役のどちらにつくかを迫られているようなものだ。誰かの意向に従った結果として誰かににらまれるような事態に陥ることは避けたいのだろう。絵に描いたような二律背反状態だ。これを言って機嫌を損ねたくなくて、極端な機嫌取りしたのかも知れない。

「いかがでしょうか。形式的にでも遠野様の委任か、宗家代行からの命令という体裁をとっていただければ、こちらとしても喜んでご協力させていただきます」

それが出来れば直にさおりさんに聞き出す方が早いんだけどね。「ナナ」

詩紀ちゃんが細いおとがいをしゃくってみせる。結局、こうなのか。

五・七・五、七・七で、さしもの市長の意志も折れた。

「一般人で下の句まで保ったのは初めてじゃない？」

「珠坂の市長が務まるぐらいだから、この人もただ者じゃないんだよ。もともと宮藤の傍流らしいし」

勅の術歌をもって命じられれば、それは神の御言葉か皇帝の勅命も同じだ。大抵は五・七ぐらいで余計な個人的情報までぶちまけてしまうようになる。事実、担当の木内さんは学生時代の一回だけの浮気を告白しはじめた。それを聞かされてどうしろと。

「任せた。ナナの好きにして」

詩紀ちゃんの許可があつたので、彼女さんだか奥さんだかの代理で許してあげた。

「あなたの罪を許しましょう。過去のあやまちは忘れ、今後は前向きに、大切な人のために生きなさい」

いく。双子間での争いでは、彼女達二人に憑いている星鬼『師門』の力を発揮する事は出来ない（あんなものを発動されても困るが）。だが、鬼憑きは基本性能で常人を圧倒している。

メイド服のスカートの中から手裏剣を取り出し、互いの眉間・喉笛・そして心臓をめがけて投擲する。その一つ一つの動作が鏡写しのように同期し、手裏剣のすべてがその道程の半ばで激突、落下する。近接してからも、苦無や警棒が一撃ごとに火花を散らし合い、連続回転蹴りが弾き合い、同種の符がぶつかり合って相殺される。

御庭番として同じ斗流人払いの儀を納めている二人とはいえ、本気の激突の筈が完璧な約束組み手のようにしか見えない。

双子の精神応力が師門を介したリンクを介して増強でもされているのだろうか。互いに相手の裏を掻こうとしても、すべての手の内が筒抜け、結局同じ動作にたどり着き、実力伯仲の千日戦争状態になっている。言い換えれば、お互いがお互いを拘束し合っている状態とも言える。なるべく誰も傷つけないで篤史さんに負けを認めてもらうには、これはかえって都合が良いかもしれない。

ならば、残る問題は篤史さんと結香さんだ。

「秋さぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる……!？」

大気の精霊の警告に従い、体を投げ出す。直後、七夏の身体があった位置を、黒光りする刃が通り過ぎた。

無様だとか言っつてはいられない。わずかでも躊躇があれば死んでいただろう。死神の鎌のような巨大な刃は、たっぷり十五メートルは離れた結香さんのもとへと引き戻される。かつての戦で魚

いく。このために準備されていた(おそらくお志摩さんの作業だ)ものであろう。多層構造の陣によって形成された高密度の防御力場はいかにも頼もしく見えるが、高位の鬼のもたらす破壊力に對しては、無いよりはまし、気休めに毛が生えた程度だろうか。何もかもがリセット前提の書き割りのごとく感じられてならない。防陣によって囲まれた空間はすなわち闘技場か。黒男さんの指示に従い、両チームはその東西の端に別れる。

この状況、まさに対峙という言葉が相応しい。「そういえば、これまで兄さんと喧嘩らしい喧嘩をしたことはなかったわね」

そんなことになる前に喜一老や市原翁、あるいはさおりさんやお志摩さんといった大人が動いてくれたため、怪獣大決戦が避けられてきたのに違いない。

だが今、その彼らが率先してけしかけようとしているように感じられるのは、本当に七夏の錯覚なのだろうか。

「姉さんは私が抑えます」

「じゃあ、ペンペンを担当するね」

左翼に終さん、右翼にリンリンが立つ。向こうは右翼に初さん、左翼にペンペンの配置だ。彼女たちは自分のやるべき事を既に理解している。このメンツが決定した時点で、戦術は自ずから決まっているようなものだ。

七瀬・宮藤の双子同士の激突も初めてだろうが、お互いを知り尽くした同士。簡単に決着はつくまい。彼女たちは互いの片割れを決戦に介入させないように拘束しあう事になるだろう。

「篤史さんと結香さんはきつとペアで動いてくるよ」

「こちらも臨機応変に対応するしかないわね。期待しているわ、

今更その人にぶっちゃけても、揉めるだけだろうし。

「ありがとうございます！ありがとうございます！金輪際他の女に見向きもしないと誓います！五ヶ瀬さんにはどきっと来ましたが、忘れませう！」

これでいいのだろう。良いことにしておく。七夏自身も前向きに生きることにする。

ともあれ、市長さんはその権限をもって記録の閲覧を特別に許可してくれた。無理矢理操るのは気が進まないが、状況が状況だから頼らせてもらおう。

詩紀ちゃんが樞の名をもって命じればより確実に同様の効果が期待できるのは確かなのだが、あれには正気度低下の副作用があるので使用が憚られる。街のために頑張ってくれる優秀な政治家を一時の都合で廢人にしてしまうようでは、さすがにやりすぎだろう。

ようやく目にするのが出来た記録は、困惑させられるものだった。遠野結香さんは書面上は一度死んでいる。正確にはご両親とともに十一年前の夏に失踪し、四年前の段階で死亡認定されていた。

しかし、二年前になって結香さんだけが生存を確認され、死亡扱いは取り消されている。これを一体どう解釈すればよいものか。

「神隠し？ 竜宮？ 妖精郷？ それとも北朝鮮にでも拉致られたか？」

詩紀ちゃん、いや美紀ちゃんが茶化すように言う。

事務的なミスが見つかったので修正しました、って解釈する方

ナナ」

詩紀ちゃんと七夏とで、篤史さんと結香さんを等分に警戒するのが正解だ。さもなくばたちまち裏を掻かれるだろう。

いちいちコンタクトを取り合っている間は間に合わない。以心伝心の連携が試される。だが、詩紀ちゃんとの結びつきは彼らに劣るものではない。七夏はそう信じている。

「それでは、泣いても笑ってもこれで最後、最終決戦、レディー」

「『ゴオオオオーッ！』」

ここは早さこそが肝要。黒男さんの宣言に呼応した皆の叫び(ノリ良すぎ)に重ねるように、最高速で呪歌を一首唱えておく。

「鳴神の少しとよみてさし曇り雨も降らぬか君を留めむ」

ペンペンが指を鳴らすと、ドームの天井付近から黒光りする鉄が落下してくる。彼女の得意の得物、対物ライフルだ。

無手のように見せておいてこの準備の良さ。仲間内でのイベントに、怪物と戦うための大物武器を準備しているのは周到を通り越して偏執的とさえ思える。

だがこの大げさな演出は冗かもしれない。篤史さんは無駄なこととはしない。その彼は足を開いて腰を落とし、右腕を突き出している。指の間に挟まれているのは四枚のコイン。その向けられた先には、ペンペンがライフルを手にする前に近接するべく弾丸のように駆けるリンリンの姿。

ドンドンドンドン。

立て続けに撃ち出されたコインがリンリンの影に次々と打ち込まれては突き抜け、対側の防陣を大きく削っていく。星鬼『衝』の電位差発生能力を利用した電磁誘導砲だ。以前彼がお遊びでレールガンごっこをやった時には、反動で自分がブロック

が普通なのだろう。ただふと行方しれずになって、九年も後に何事もなかったかのように見つかった、なんて据わりの悪い解釈よりはよほど説得力がある。

大人が何らかの目的で蒸発したのならともかく、当時の彼女は小学校低学年だ。もし失踪が真実であったなら、そこには何らかの事件性を考えざるを得ない。何らかのドラマの存在を期待してしまえば、気持ちの良い想像にはならない。

しかし、そこに何らかの壮絶な出来事を挿入するには、彼女の性格は脳天気過ぎる。

心の傷を隠して陽気に振る舞っている、という感じではまるでない。人の発言は字義通りに受け止めるし、彼女自身の発言には言外の意味などない。たとえて言うなら、古典的な漫画に出てくる良くできた幼なじみのようだ。理想的なよい子であると同時に、薄っぺらで個性に乏しい。

詩紀ちゃん達のようなのはさすがに極端としても、思春期の少女少女は大抵もっと面倒くさいものだ。言っては何だが、典型的アホキャラの鈴菜でも、あれで年齢相応にものを考えている(はず)。一方、裏も表も感じさせない結香さんへの対応は実にお手軽ですむ。

それだけではない。彼女には独特のバランスの悪さがある。

見た目の緩い雰囲気からはなかなか想像がつかないが、結香さんの身体能力はあれで相当に高い(ここは、鬼憑きの例に漏れず、と言うべきか)。人数の足りない運動部の助っ人として頻繁にかり出されている人気者なのだ。バスケットボールをやらせれば百六十センチ台でダンクシュートとかこなすし、ソフトボールをやれば崩れた体勢からでも腕力でホームランにしよう。

それなのに駆け引きとか全然出来ないのが、いかにも彼女らしい。相手の意表をつこうなんて思いもよらず、フェイク動作には反射神経だけで対処してしまおう。外野から一直線にキャッチャーに送球できるのに、上手くボールを回せばダブルプレイにできるとかまで気が回らない。勢いで味方を引っ張ることは出来ても、何らかの作戦でもってチームを率いて戦うとかはからっきしだ。

目立ちたがってスタンドプレイを好むとかいうわけではない。ただ臨機応変が苦手なだけで、指示をもらいさえすれば素直にチームメイトに合わせられる。複雑な判断を含めた指示には対応しきれないところが、いかにも、らしい。天真爛漫で抜けたところも多く、鼻につくところがない。いろんな部で重宝され、愛されている所以だ。ピーカン結香ちゃんとはよく言ったものだと思う。

面白いのは、篤史さんが見ているときには動きが一変することだ。彼がごく簡単な指示をとぼすだけで、結香さんのプレイが友人のそれになる。観覧席からの声かけだけで巧みにチームの力を引き出せる篤史さんが、弱小部の助っ人監督として頼られているのは確かだ。だが、結香さんの変貌っぷりはほとんど別人。身のこなしも試合運びも、まるで篤史さんそのものに見える。

それでいてなお、自分がどういう目的で動いているのかを全然理解できておらず、結果として個人でのプレイスタイルは全然変化しない。結香さんが結香さんたるゆえんだろう。意味が分からないままにああも迷いなく適切に動けるものかと、感心を通り越して不思議に思える。背景に全幅の信頼があるのは間違いないだろうが、強い絆で結ばれたベットと主人というより（この例えで彼女が機嫌を損ねることはないと言言できる）、上書きでの遠隔操作とでも例えた方がしっくりくる。

流を二つに割る争いのいずれに荷担することも耐えかねた、詩紀ちゃんも篤史さんも選ぶに選べなかった人も多かったのだろう。かく言う七夏とて、斗流のリーダーとしての詩紀ちゃんと篤史さんに決定的な差は見つけられない。どちらが看板になっても、組織全体としての力にそれほど差が出てくるとは思えない。各家の間形式の差があると言っても、七夏達の間柄は気の置けない友人達だ。たとえリンリンあたりが宗家を襲名したとしても、みな喜んで彼女を支えるだろうから。両チームとも無意味な罰ゲームが回避できて良かったと思うぐらいだ。

だからこそ、幼なじみ達の雰囲気やギスギスさせてまで真剣に勝ちに来ている篤史さんの真意が分からない。分かりたくない。仮説が当たらないことをただただ祈るだけだ。

「さて、いよいよ最終ステージだ」と、黒男さんが宣言した。

三ステージ制だという事さえたった今聞かされたわけであるから、この儀式のいい加減さ、ひいては斗流宗家なんて形式的立場の無意味さがよく分かる。

「なんだかんだ言って最後にモノを言うのは実力。両候補者の個人戦闘力とチーム指揮能力のほど、見せてもらおう」

もしや、この場でどつきあいさせる気なのだろうか。

「内容は両チームの模擬戦闘だ。勝利側には300点が加算される」

この点数割だと前二ステージは何点とってても一発逆転になるから、一同いじられ損だ。さおりさんかお志摩さんかは知らないが、考えたヒト、鬼すぎる。なにもそこまでクイズ番組然としなくてもいいだろうに。連続で罰ゲームを回避できた幸運に感謝し

それにしても、

「ゆっか、上上下下左右左右BダッシュA！」

「はいっ！」

なんてのはいくら何でも酷すぎだろうと、篤史さんにそれとなく苦言を呈してみた事がある。さすがにリモコンとか言うのは憚られたので、

「一心同体・以心伝心って感じですよね」

とオブラートに包んでいたところ、

「ゆっかは俺の幽波紋だからな」

と笑って断定されてしまった。

「俺がゆっかを一番上手に使ってるんだ！ 敵に渡すな大事なりモコン！ シンクログラフ安定していますす！」

続いてロボ扱い。デリカシーゼロ。

「篤史ちゃんって女の子の扱いが上手いんだよ。私だけじゃなくて、みんなそう言ってるもんね」

発言にはだいたい語弊があるが、結香さんは気にしている節がないばかりか喜んでさえたわけだ。

本人が幸せなら良いか、と当時は思っていたが……

彼女の自意識の薄さはやっぱり不自然すぎる。人形っぽい容姿の詩紀ちゃんや、人形っぽい態度の撫菜よりも、表情豊かで活動的な結香さんの方がよっぽど人形っぽく感じられるのはどうしたところか。

「もともとそういう役割を期待されているキャラクターなのかもしれないわね」

考えを巡らせていると、詩紀ちゃんがそんなことを言い出した。

「！」

たい。

「時間無制限一本勝負。現状で使用可能なあらゆる装備、そしてあらゆる術式の使用が許可され、どちらかの候補者の死亡・気絶あるいはギブアップで決着とする」

それはもう全然模擬ではないと思われ。いわゆるガチバトル。もうポイントとか全然意味がない。

「参加者・参列者の安全性に関しては概略での原状回復を保証する。全力でやってもらって結構だ」

結果さえ出せば後はドリフトで巻き戻せるようになっていて、との意味なのだろう。記憶媒体となる大輔だけ安全のため隔離して中継画面でも見せてるんだろうが。あのへんの話は機密事項のはずだから、参列者的には余計に心配になる説明ではなからうか。大輔が知らない人物についてはまとも再現されずに辻褄だけあわされる可能性が十分以上にあるのだが……

そんな風に他人の心配をする余裕がある。篤史さんと戦えと言われても、今更動揺はない。こうなることはある程度予想できていたからだ、と七夏は自己分析する。きつと篤史さん達も同じだろう。

このルールなら篤史さんがどのぐらい本気なのか嫌でも分かる。いや、逆説的ではあるが、この事あるを予想したからこそ彼は本気になったのかもかもしれない。

もしそうであるならば、残された手段は真っ向勝負しかないかもしれない。

アリーナ席の参列者がフェンス寄りへと誘導され、スタジアムの中央部に広いスペースが作られる。

周囲に術師達が配置され、垂れ幕サイズの巨大な符を展開して

七夏の主張に感じ入ったのだろう。会場からはしわぶき一つ聞こえない。

手応えアリ。言ってやったり、といったところか。

「なったんなんな……もごもごもご」

ただ一人の例外として、真っ赤になった詩紀ちゃん（と言うか美紀ちゃん）が何か言いたげにしているが、終さんが後ろから羽交い締めにしたうえ、リンリンが両手でもって口を塞いでいるため身動きがとれない。打ち合わせもなしに見事な分業体制、グッジョブ。

司会の黒男さんが辺りを見回し、一步進み出た。

「これですべての応援演説が出そろった事になるが、投票の参考として会場からのご意見をいくつか伺っておきたいと思う。発言を望む者は挙手を」

彼の言葉に応じ、観客席を埋め尽くすかのような多数の手。一部水かきがついていたり触手だったりするが、その辺は見なかったことにしておく。

「ふーむ、これはどうしたものかな。さおりさん、審判団の代表としてお願いできるか？」

「了解」

ただの一睨みで会場のブーイングを抑えてから（こういうところが恐ろしい）、何度も深々と頷くと、さおりさんはこう宣った。「みんなの言いたいことはだいたい分かっているわ」

おもむろに両チームの席に向き直ったさおりさんは、オーケストラの指揮者か砲兵隊の指揮官よろしく右手を高くと差し上げた。「それでは皆さんご一緒に。せーの、」

一瞬の静寂の後。さおりさんの右手が振り下ろされると同時に、「綺麗で素直でしかも理由もなく兄さんが大好き、兄さんがいなくて生きていけない、でも兄さんを束縛しようとはしないなんて、兄さんにとって都合が良すぎるもの」

じつに身も蓋もない事をおっしゃる。

「ナナが今のナナなのは私がそう望んだから。私が今の私なのはナナがそう望んだから。自分が自分であるためどうしても曲げられないところ以外は、お互いの好みを反映しているでしょう。卵が先か鶏が先かはわからないけど。私のいる珠坂ってのはそういう場所なのだから」

「……僕が女顔なのも筋肉つかないのも詩紀ちゃん達のせい、と」

「悪目立ちする髪の色も、年齢相応にカップが大きくならないのも、ナナのせい、と」

む、藪蛇だったか。

でも詩紀ちゃんに隠し事しても無駄。

「うん、そこは否定しない」

「聞き直った!？」

詩紀ちゃんの容姿が七夏のにストライクなのは確かなので、こんなところで自分に嘘はつけない。無意識ではあっても、自分の生きやすさやプライドよりも七夏の好みを優先してくれたのなら、多少の嫌味ぐらひは我慢しないといけないだろう。

「非難は甘んじて受けるから、ぜひともそのままお願いします」

感謝の気持ちを込め、精一杯真摯な態度で頭を下げておく。

「って、そこまで!？」

「ぜひともそのままお願いします」

「二回言った!? そんなに大事なの?」

まだ頭上げない方がよさそう。

「……リア充爆発しろっ!!!」

ドームを怒号が埋め尽くした。

「以上よ」

全く予想外の反応だった。七夏的には完璧な応援演説ができたと自画自賛していたが、何か問題があったのだろうか？

幼なじみ達の強い結びつきに感じ入ったのを、照れ隠しのツンデレ表現したのだろうか。いや、きっとそうだ。そうに違いない。

「七夏さん、本当に幸せな方ですね」

終さんがしみじみ言うとおり、七夏は幸せ者だと思う。

一度は離ればなれになったとはいえ、僕らの結びつきは簡単には碎かれない。篤史さんとのぎこちなさも、この儀式が終わりさえすればきつと元通りになるはずだ。そう信じている。

「では参列者の皆、前もって配布してある投票用紙を確認のうえ、いずれかの候補者に丸印を書き込んでくれたまえ。投票用紙はこれよりスタッフが回収するが、混乱の無いよう協力をお願いします」

十五分後。

「ただいまの投票の集計結果についてについて説明する。両候補者の得票数が僅少であったと同時に、いずれの候補者とも判断できない無効票あるいは棄権票が過半数に達していたため、得票に優位差はないと判断された。審判団の協議により無効試合として両チームには機械的に50ポイントずつ振り分けることが決定された由、お伝えしておく。残念だが今回も罰ゲームは省略だ」

スタンド席を見る限りでは、字を書けないかあるいは投票の意味さえ分かってない連中が相当混ざってたんじゃないかという感もあるが、それにしても半分以上無効ってのは尋常ではない。斗

「……はあ、分かったわ。他の誰かならともかく、ナナがそこまで言うのなら諦めるしかないか」

こんな大きなため息は初めてかもしれない。でも快諾でなくとも承認は承認。

彼女の両手を握りしめて何度も何度も振り、だめ押しの感謝の気持ちを表現。

「ありがとう! 本当にありがとう!」

「選挙直後の候補者ですか。そこまで喜ばれても複雑なのだけけれど」

呆れ顔で言うが、頬が赤らんでいる。明らかに美紀ちゃんが出てるし。満更ではないのだろうか。

「もう、話を戻しましょう」

「いつでもどうぞ!」

「つやつやしちゃってまあ……」

なんとか諦めてくれたと見える。ここまで念を押しておけば、後ろ向きドリフトで書き換えされちゃう心配はいらないだろう。かくしてこの世で何番目かに大切なものは守られた。黒髪巨乳の詩紀ちゃんなんて詩紀ちゃんじゃないし。

「少なくとも今現在の結香さんは、徹底的に兄さんに従属した存在のように見えるわ。誰かの意志・願いが介在して、本来とは別のモノになってしまっているのかもしれない。自分がそれを叶えたのかもしれないのに、仮説ぐらひしか出せないなんて無責任だけど」

「きつとそれで良いんだよ。自分で歴史を変動させつつ、大輔君みたいに変動を認識までできたら、詩紀ちゃんはきつとその重さに耐えられないからね」

「……そうかも」

七夏が引っかけたのはそこではない。

「別のモノになる、か」

その言葉は、既に確定した歴史を書き換える、以外の意味も有するのかもしれない。

かつての事件の時。押し寄せる深みの者どもを押し返すために、結香さんは髪を変形させて鞭や刃として用いていた。詩紀ちゃんに変幻の星鬼の術だと言っていたが、あれは何だったのか。改めて尋ねてみる。

「あれはさおりさんの受け売り。権あるいは権の憑いた身体は仮想物質とでも言うしかないものに置き換わり、通常の物理法則には従わないのだそうよ。姿を保つために外部からの認識を必要とする一方で、不確定状態を介することで必要に応じて瞬時に最適な姿をとれるって」

そういう理屈だとすると、鬼を呼んでその力を引き出して利用する術式と言うには無理がある。彼女自身の体を変貌させているのだから、鬼憑きのだろう。

と、仮説を披露してみると、

「同感。さっきの話のように誰かの願いが絡んでいるのか、それともただの偶然かは分からないけど。何らかの事故で身体の一部を損なって、そこに鬼が憑いたのでしょね。初・終の腕と同じようなものなのでしょうけど、高度な擬態能力のおかげでどこがそうなのか分からないってだけで……ん、知っていたつもりでも、こうやって口に出してみると情報が整理されるものね」

「髪だけではないかもしれない、と」

十年以上前の結香さんの、少年じみた姿を覚えている。確かに

味方に背中から撃たれたような状況に、さすがの篤史さんも呆然自失といった様子。

「続いてのりちゃんチームの面々にも応援してもらおう」

「終さん、お願い」

期待をこめた眼差しを送ると、終さんは解答席の陰でこっそりと親指を立ててくれた。彼女は姉ほど堅物ではないはずだから、詩紀ちゃんのちよっとエキセントリックなところに対しても許容してくれそうだ。そうでなくては小中高と何年もの間、付き人同然につるんでないられるものではないだろう。

「宮藤終、僭越ですが新川詩紀様を批評させていただきます。失礼な物言いもあるかと思いますが、どうかご寛恕いただきたく存じます。詩紀様におかれましては、篤史さんと比べて容姿が若干プラスされますが協調性がだいぶ劣ります。ただ、七夏さんのサポートがある分、斗流宗家としての適正は篤史さんより多少マシといったところかと」

ダメだった。若干大雑把になっただけで、点の辛さと容赦のなさは姉と大差ない。

この人達、普段は無闇矢鱈と僕らのことを持ち上げるけど、本当にそこまで尊敬しているのかは怪しいものだ。もしや褒め殺しの一種ではなからうかとさえ邪推したくなる。少なくとも、幼なじみとしての友情ぐらいいは感じていてくれると信じたのだが。

「リンリン、頼むよ」

「ほーい。しのりんのマブダチ七瀬鈴菜だよ。いやー、しのりんヤバイよ。マジでヤバイって。どのぐらいヤバイかっていうとゲロヤバでもオニヤバでも足りないぐらいとにかくヤバイ。ヤバスギ」

愛らしい子供ではあったが、顔のパーツの作りも全体としての方向性もだいたい異なる。かつての彼女を今の容姿と結びつけて同一人物と同定することは難しいだろう。

大輔ではなく、七夏の記憶上に不自然な連続性がある。少なくともその部分に関しては、ドリフトによる変革ではない。

「そうそう。昔、寄○獣って漫画があっただけね」

「すっごく嫌な例えをありがとう」

結香さんの綺麗な顔がぱかっと開くようなのは勘弁して欲しい。「じゃあ物○Xということだ」

「もっと嫌だから」

この話題はすっぱり忘れよう。

ともかく、彼女に鬼が憑く原因となった出来事にこそ、ここ最近の篤史さんの態度の鍵がありそうだ。二人が僕らの前から姿を消したのは、七夏が巻き込まれた例の事故の一年ほど前だったはず。

「うちの両親からは転校したって聞かされてたけど、詩紀ちゃんは何か知らない？」

「結香さんが珠坂に戻ったのは私の少し前だそうよ。そのさらに少し後に兄さんが戻ってきて、色々あって結香さんとかくっついた」色々あって、って……まあ重要ではないと判断されたんだろうけど。

「十家の師弟が集団生活を送るのと一時珠坂を離れるのは、昔からの習わしだって聞いたことはあるけど」

詩紀ちゃんは一度言葉を切った。

「でも、私もナナもワケありだった」

「そのときに何かあったと考えるのが自然だね」

以下、おっそろしく感覚的で中身の無い賞賛(?)が続いた。きつと褒めてる、んだろなあ……。

ラスト、七夏の番だ。

今のところはどう鼻屑目に見ても五分と五分だろうが、ここで逆転を決めてみせると誓う。

介添え役に選んでもらえて良かった。ここまで良いところの無かった七夏だが、詩紀ちゃんへの愛では誰にも負ける気がしない。七夏が一番上手く詩紀ちゃんを褒められるのだから。

いっそ古今和歌集とか引って張ってきて例えるのも良いのだけど、無闇に言葉を飾るのはよそう。ストレートに、七夏自身の素朴な言葉で彼女の魅力を伝える方が良いだろう。

「五ヶ瀬七夏です。僕に少しだけ時間をください。これは皆さんのためでもありますから」

これは誇張のない本音だ。

「端的に言って、僕の詩紀さんは萌えます。この世で一番綺麗なだけでなく、性格が最高です。照れ隠しに偉そうな台詞を言っているところをじーっと見つめると、だんだん尻すぼみになっていって最後には逆ギレしちゃうのとか、可愛くて可愛くてもうたまりません。いいですか、可愛いは正義です。こういう場合、萌えは唯一無二の価値基準なのです。実用性とか、世界に対する危険性がどうかとか、そんなのはどれもこれも些細な問題にすぎません。だからこそ、詩紀ちゃんがどれほど可愛いらしい人なのか、彼女の魅力をぜひみんなにも知ってもらいたい。いかに立派な人物であってもマッチョなアニキと、黙ってれば綺麗で口を開けばツンデレなお姫様と、どちらを王に戴きたいと思えますか？ 僕からの話はそれだけです」

変わらず偏っているが、役に立つこともあるんだなあと妙な感慨を抱く七夏。

以下、ほんともうでもいいような重箱の隅問題ばかりだったが、うちのメイドさんや後輩達は規格外すぎる。二十問のうち一問たりとも取りこぼし無く、十問ずつの正解で痛み分けというのは驚異と言っている。

「私たち何もやってないんだけど」

「優秀な仲間にも恵まれるのも主としての資質、って意味なんだろうな」

「そう言うナナも何もやってないんだけど」

「面目ない」

「次は全身全霊をかけて頑張るように」

「了解」

と安請け合いはしてみたが、次って何をやるのだろうか？

「ファーストステージは痛み分けということで、残念ながら罰ゲームは省略」

黒衣から台本を受け取った黒男さんの少しほっとした表情からすると、罰ゲームとやらを回避できたのは幸いだったのだろう。

「さて、セカンドステージは両チームの推薦人による応援演説だ。点数は会場からの投票をもとに振り分けるぞ。耳をこぼして一言一句たりとも聞き逃すな」

応援演説と聞くと生徒会長選挙時の大騒動が思い起こされて辟易するが、考えてみればこれこそ七夏が真価を発揮できるステージだ。

「遠野結香です。篤史ちゃんはすっごいです」

結香さんの第一声。

そして七夏達のように、珠坂から隔離されていたと。

「ちなみに、リンペンはずっとここにいたんだよね？」

「初一人であの二人の面倒は見切れないでしょ」

それは至極もつともではあるが。

「つまりは、必ず離れなければならぬって訳ではないんだね」

さらに疑惑が深まった。

結香さんがどういう状態になっているのか。そして彼女に何が起こったのか。

「もう直接会って調べてみるしかないか」

彼女自身に自覚が無くても、今の七夏であれば魂の状態を調べる術はいくつか使える。

「兄さんに宣戦布告と判断されるわよ」

「そっか、本末転倒か」

篤史さんの気が変わるのを期待するなら、ダイレクトに結香さんに踏み込むような真似は逆効果だろう。正攻法で集められるだけの情報を集める。そのあとは想像の翼を広げ、推理するしかない。

「ともかく、核心に迫る何かはつかめたわ。あとはこのカードをいつ切るか。最大限の効果が得られるタイミングを見計らわないと」

そんな悪辣な真似をやるつもりなんか無いくせに。相変わらず偽悪的な詩紀ちゃんだった。

「なに？ 言いたいことがあるのなら、言ったらどう？」

「いやあ、そういうところが可愛いなと」

「〜っ！」

聞くに堪えない悪口雑言はカットさせていただきます。

「どの辺がどう凄いか k w s k ! うわなにをするやめ r」

「どうか静粛をお願いします」

野次をとばしたギャラリィが数人の黒衣に排除される。さすがに手回しが良い。

「篤史ちゃんは強くて優しくてかっこいいヒーローです。だからみんな篤史ちゃんが大好きです。もちろん私も大好きです。おわり」

まるっきり小学生の作文だった。これは点数つける方も困るだろう。

続いて立ち上がったのはペンペン。

「七瀬撫菜。私にとって新川篤史氏は生涯の目標の一人。喜一老の血を引き直接の薫陶を受けたサラブレッド。博覧強記にして、コレクションの質の高さは鑑定眼の確かさを物語る」

淡々と、簡潔に端的に、彼女の目から見た篤史さんを描写する。「古典からやおいに至る幅広い見識と、初見の作品に対する的確な分析力。誰もが彼を畏敬するだろう。この国のオタク界にとって、篤史氏は得がたい逸材と結論する。以上」

これ、ペンペン的には最大限の賛辞なんだろうなあ。

そして初さん。

「宮藤初、僭越ですが新川篤史様を批評させていただきます。失礼な物言いもあるかと思いますが、どうかご寛恕いただきましたたく存じます。篤史様におかれましては、戦闘能力90点、知性82点、容姿85点、協調性71点、デリカシー15点相当。私見ながら斗流宗家を務めるに十分、どうか合格点と言って良いかと存じます」

点辛っ！ 容赦なっ！ 応援演説じゃないのこれ。

「お前ら、なあ……」

そして七夏達はそれなりの仮説を携えて今に至るわけであるが。

「……なんぞこれ」

七夏は詩紀ちゃんと並んで座らされている。背後の席には鈴菜と終さん。

一方、篤史さんは結香さんと並んで座り、その背後には撫菜と初さん。

「なんぞこれ」

大事じゃないけど二人で二回ずつ言ってしまった。

神職の衣装を身にまとった芳村黒男さんが荘厳な雅楽の演奏とともに中央に進み出て、既に斗流宗家位の返還を受けている旨を宣言した。

どの候補者にも肩入れせず中立を保ち審判を下せる立場の代表者として、形式的には宗家直轄で実質には独立組織である肅清部隊の頭が出張ってきたという事らしい。

そこまではいい。優勝旗とかチャンピオンベルトの返還みたいなものだろう。歴史のある神社の境内あたりなら、そういうのも相応しい気がする。

しかし、珠坂大学のドーム野球場を借り切って設営されているのは、一言で説明するならバラエティーショーのセットに近い。いかにもチーム制でのクイズ番組の形式だ。

アリーナ席にもスタンドにもギャラリィ、ギャラリィ、ギャラリィ、そしてギャラリィ。大して大きな市でもない珠坂の一体どこにこれだけの人間が居たのか、という疑問は一瞬で氷解した。

見る者が見れば、明らかに人でないモノが相当数紛れ込んでいるのがわかる。思想的な同調や恐怖による支配により斗流に従う妖魅バグミが存在するであろう事には薄々は気づいていたが、よもやこれほどの数とは思わなかった。

いや、すべてがそうとは限らない。

樞憑きである詩紀ちゃんの水の魔物達にとつては総大将も同じであるから、いつぞやのように彼女が命ずれば魔物達は動く。だが今回に関しては、彼女自身の意図は一切反映されていないと言

う。

七夏自身も含め多くの者は樞イコール水の魔物の総大将だとばかり思いこんでいたが、故お志摩さんが残していた研究によるならば、水の魔物の総大将は樞そのものではなくその神官のような存在だと言う。九頭類の総帥たる彼(?)はかつて樞をその身に降ろして世界を支配していたが、ひとたび滅びた後に身体は再生したものの樞の加護を失ってしまい不完全な休眠状態にある、というのが真実だとか。その言説に従うなら、水の魔物にとつては詩紀ちゃんは新たな総大将であると同時に、かつての総大将の復活を妨害する要因でもある事になる。

となれば、水の魔物達の中にも二つの派閥が存在するだろう。現時点での樞の巫女である詩紀ちゃんを支持し守り従おうとする者たちと、彼女を排除し本来の主を再臨させようとする者たちだ。あくまでも彼らの神である樞に従う事を優先する者たちと、同族である神官に忠誠を尽くす者たち、と言い換えても良い。

どちらのグループにせよ、結果や迎撃といった妨害活動がなければ彼女の周囲に集まってくるのは想像に難くない。どちらの意図を持っていたとしても、妨害を排除して彼女に近づくと

ころま

いようと逆転の目はない。魂を限界まで削り合っ

ての生死に関わるレベルのぶつかり合いならいざ知らず。ただかゲーム程度では常に圧勝する筈の詩紀ちゃんが、わずかなりと押されている。それは、運命や歴史の書き換え、すなわち横行ドリフトが起こっていない事を意味する。

斗流の要である白銀珠比女命は偶然を操って願いを叶える女神の名であり、樞憑きの巫女を現人神とみなす称号でもある。その本質は珠坂を中心にこの国全体に敷かれた陣を介して働く回路といえ、巫女がハブとなり人々の魂を群体化してドリフトエンジンを形成することによって成立している。

すなわち、樞の巫女の願いは自動的に叶えられるのだ。とりわけここ珠坂においては、その力はひととき強い。

初さんの押しボタンは、それが例え百万分の一の確率であっても故障・誤動作を起こしてははず。だが今回に限ってはなぜかそうならなかった。

これは仮説だが、この場に限り陣を打ち消すような処置が施されているのかもしれない。そもそも主となるべき人物の選抜に用いるための場であるから、本人の身につけた能力だけで争えと言うことなのだろうか。あのお志摩さんが関わっているなら、それも十分あり得る話だ。

実力で勝っていると証明してみせよ、か。

詩紀ちゃんと目配せし合い、互いの覚悟が同じであることを確認する。

「第二問、これは基本だ。斗流十家のうち本家が現存しているのは? すべて答えなさい」

ポポポポーン。

での手段は共通なのだから。彼らがどれほど人間に近いメンタリティーを持っているのかは分からないが、誰がどちらの派に属しているのかは彼女の元にたどり着いてからの行動を見るまでは分からないわけで、疑心暗鬼のようなものがあるかもしれない。人類だけに飽きたら異種族の揉め事の原因にまでなるとは、いかにも詩紀ちゃんらしい大物っぷりだ、と褒めたら怒られてしまったが。

表向きには冬季スポーツ大会に付随したイベントという体裁をとってはいるが、実際にはこの国の陰の支配者とも言える斗流新宗家のお披露目であるから、一般人はシャットアウトされており、取材のマスコミも息が掛かった者で固められている。国家の維持に責任を持つ各界の実力者達が集まっているばかりか皇位継承権を持つ皇族も参加しており、ことによると今上帝がお忍びで参列されていてもおかしくない、そういった儀式だ。そんなところを襲撃された場合の国家運営へのダメージは計り知れないわけであるから、裏も表もこれ以上はないほどの防備が固められているが、それはとりもなおさず他の場所の防備が薄くなっている事を意味する。範囲を絞った集中防衛の態勢だ。

しかし、現に客席にはとんでもない数のバケモノが進入している。スタジアムは百鬼夜行を通り越して、今や理解不能な混沌空間となっていた。

見た目普通の人間に見えるのはまだいい方だ。本性は悪路王やら大獄丸クラスの巨鬼だろうか、どう見ても縮尺が狂っている連中もいて、お前のようなババアがいるか!、とでも突っ込みを入れたくなる。

遠目にはそれなりに人間っぽく見える半魚人どもはともかく、

終「新川・仁藤・四三しそ・五ヶ瀬・陸奥・七瀬・宮藤」

「正解です。のりちゃんチーム、10ポイント獲得」

あれ?

「新三家の宮藤は入って遠野は含まれないの?」

「公式にそういう事になっているというだけで、理由までは存じ上げません」

詩紀ちゃんに問われ、答えた終さん自身が首をかしげる。宮藤の双子も事情は知らされていないようだ。

結香さんの父方の祖父母はかなり昔に亡くなっている。四年前の時点で遠野家は断絶と判断され、結香さんの生存が確認されたからも回復されていないのか。さもなければ、十家は現在の結香さんの状態を生存と見なしていないのか。

考えを進めるまもなく、次の問題へ。

「第三問。斗流の主には幅広い見識が必要だ。こんなのはどうか? オリジナルアニメーション『指定侵入少女チカリカAD』第五話の作画監督をフルネームで答えなさい」

見識て……

ポポポポーン。

鈴菜「四不像味噌煮込みっ!」

「正解です。のりちゃんチーム、10ポイント獲得」

「第四問。戦には欠かせない武器に関する問題だ。六号戦車ティガーの履帯ブロック数は片側でいくつ?」

ポポポポーン。

撫菜「94枚」

「正解です。あっちゃんチーム、10ポイント獲得」

啞然としている間にどんだん進んでいる。リンペンの知識は相

伝統とかガチ無視のこういうセンスはさおりさんっぽいけど、あの真面目な黒男さんにここまでさせられるということは、仕掛け人はさおりさんではなくて故志摩さんかもしれない。どちらの仕業にしても、七夏ごときに対抗できる相手ではないという意味では大差ないのだが。

「ステージごとの罰ゲームとして候補者の恥ずかしいプライベート情報を大公開予定、みんな大いに期待してくれ。さて、ファーストステージは早押しクイズだっ！」

本当にクイズをやるつもりなのも大概かどうかと思うが、司会の黒男さんの台詞に聞き捨てならない一文が含まれていたような。

その情報とやらがどこから提供されたものか容易く想像がつくが、考える気になれない。観客（実質的にそう呼ぶべきだろう）の異様な盛り上がり方も気に入らない。

あまりといえればあまりの展開に、詩紀ちゃんは呆れと不快感を隠そうともしない。

「これで絶対に負けられなくなったわね、ナナ」

いや、もともと負けるとはいいかんのだけれども。

「負けたら腹いせに引っこ抜くかも」

「何を？ ねえ、何を？」

「……」

沈黙が怖い！

「ボタンは個人ごとだが、お手つきはチーム全体のミスと見なし、相手チームに解答権が移るから要注意だ」

急展開（と詩紀ちゃんの脅迫）に対応しきれず心の準備を整えられていない七夏を尻目に、黒男さんは解説からの流れでいきなり出題開始。

フードの隙間から縦長の虹彩を見え隠れさせつつ不自然にふくらんだコートを引きずっている不振な連中は、蛸頭に九脚の九頭類だろうか。その一体から粘液のからみついたポップコーンの袋を差し出されたスーツのおじさんが、苦笑しつつ丁寧に辞退している様子が見える。

あげく、まったくごまかす意志さえ感じられないもの。どうやって移動してきたものかは見当もつかないが、スタンド席を五人分ほど占拠して転がっている鯨からは、皆が意図的に目を逸らしているのが明らかだ。

誰かが悲鳴を上げた瞬間にパニックが激発しそうなものだが、不思議とそうはなっていない。あまりの異常事態に、誰もが必死で気づかぬフリをしている。

身を置く世界は違えど、ここに集まっている人物達はみな何度となく修羅場をくぐってきた猛者ばかりのはずだ。これだけの密度で敵味方が混在した状態で、ひとたび揉め事が起これば大惨事状況をそうと認めてしまった瞬間にカタストロフが起こりうることを、みな敏感に察しているのだろう。牽制と過剰な自信と自己欺瞞と冷静な判断が、呉越同舟の絶妙なバランスを保っている。

つい悲鳴を上げかけた人間に対して、周りじゅうの人々（でないものも）、しーっ、と人差し指を立てたゼスチャーでもって声さえ挙げなければ大丈夫だと宥めに入っている。

もう一回言おう。

「なんぞこれ」

なんというか、いたたまれない。

国の急所を舞台に混沌を演出した者が居る。おそらくは意図的に防備に穴を作ることで敵を内懐深く迎え入れ、この国のおかれ

「さっそくの第一問は故郷への愛が試される問題。珠坂市の花といえど何？」

ポポポポーン。

二つのランプがほぼ同時に転倒する。両チームに分散している宮藤の双子が間髪入れずに解答ボタンを叩いたのだ。

「はい、わずかに早かった、宮藤初さん」

「キダチルリソウ」

「正解です。あっちゃんチーム、先制の10ポイント獲得」

奇襲に対し全く動じることなく適応している。儀式の詳細は当日まで分厚い機密のベールに囲まれ、対応のための下調べなど出来ようはずもなかったのだから。つまりはこの二人、予備知識だけで瞬間的に解答にたどり着いたのだ。

いや、彼女たちならそのぐらい容易くやっつてのけるだろう。大した問題ではない。

それよりもっとも奇妙なことが起こっている。捨て置けない。こと勝負事において、詩紀ちゃんが相手方に一点たりともとらせるはずがないからだ。

もともとそこまで積極的ではなかった詩紀ちゃんだが、あままではつきりと宣戦布告されては、勝ち気な彼女が刺激されないはずがない。

「勝つ気、あるんだよね？」

「そのつもり」

あまりにも常識的な展開に、当の詩紀ちゃんも首をひねるばかり。

偶然には常に彼女の味方のはずだ。麻雀で延々天和を連発するような圧倒的な幸運に対しては、どれほどのテクニクを有して

た不安定な立場のミニチュアを作り出して見せたわけだ。

そんなろくでもない事を考えつくような人間がさおりさん以外にいないとは思えないが。

薄氷を踏むような状態を可視化して偉い人たちを放り込む。ただの嫌がらせにしてはリスクに過ぎるが、妖魅の存在と脅威を知らしめ斗流の重要性をアピールするとか、きっとそれなりに深い意味があるのだろう。どちらにせよ嫌がらせには間違いないだろうが。

しかしこれは厄介だ。

こうも混ざり合っていないとなくとも広範囲殲滅術式は使えないし、乱戦に対しては個々人の防御力しか意味がない。魔物達が乱戦による犠牲を厭わなければ、ジ・エンドだ。最悪の場合、詩紀ちゃんの命令で詩紀派と旧樞派の魔物達を同士討ちさせる、という手はあるが……とにかく詩紀ちゃんは七夏達が断固として守りきるとしても、人類側にもかなりの被害が出るのは間違いない。彼らの思考プロセスが謎なのは前述した通りだが、妖魅どもにしてもこちらに戦う意志がないことの察知や、無駄死ににたくはないって感覚ぐらいは持っているようなのは幸いだ。とにかく、今は刺激しないようにするのが重要だ。こんな状況を自ら作り出しておいて何の保険も用意しないさおりさんではないから、迎撃戦力は巧みに隠蔽されているのだろう。

そこで気づいた。

儀式を進めている黒男さん以外の櫛メンバーの姿がない。彼の妻にして神剣レーヴァテインのクロヒメである玲韻さんも、娘にしてダインスレイフのクロヒメである睡蓮ちゃんも。それに、斗流内部でも丈司さんや大輔君が居ない。

「睡蓮ちゃんの『茨の園』は一定範囲内の格下の生物を死に至らしめるし、玲韻さんの炎は九頭類だろうが蛇権だろうが人だろうが鬼だろうが構わず焼き尽くせる。アスカロンの明日香さんは丈司さんが手綱を放した途端に、竜種という竜種を一頭残らず根絶やしにするべく動くだろう。」

エクスカリバーの絵莉華さんやデュランダルの樹菜さん、それに莫耶の萌衣ちゃんは部外者なれど斗流に協力的だし、これだけの脅威が存在すれば、斗流の指揮系統に繋がらないアメモムラクモ、それにテュルフィングも個々の判断で動くに違いない。

少しでもおかしな事になった瞬間、スタジアムには彼女たちの広範囲殲滅攻撃が叩き付けられ、魔物の群れを参列者や自分たちごと消し去る算段になっているであろう事は十分想像がつく。それだけ聞くとただの自殺行為のように思えるが、クロヒメ達と尚書憑きの大輔さえ残っていればなんとかなる事を七夏は知っている。

彼女たちの干渉力を結集すれば、大輔の記憶に基づいて世界をドリフトさせることで、すべてを無かったことに出来る。リセツトとはいっても内容は大輔の主観に基づき、かつクロヒメ達の解枳が入るため百パーセント元通りではあり得ないが……円満解決しなかった場合の保険としてはアリだろう。かく言う七夏も彼の記憶能力をあてにした作戦を考案した事がある。

だが、客席のかんりの部分を占める妖魅軍団に穩便にお引き取りしてもらうにはどうすればいいのか、そのとっかかりさえ見つかからないところが今回の大問題だ。

「この儀式はあくまでも儀礼的なものだが、だからこそ新たな時代に相応しい趣向で執り行わせていただく」

かい始める。

昼休み。教室前の廊下で七夏が詩紀ちゃん姉妹をからかっていたところに（クーデレ&ツンデレ反応が可愛いのでついやってしまっ）、篤史さん達が通りかかった。

「あ、篤史さん」

七夏達に目をとめながらも足早に去っていく篤史さんの後を、ただ事ではないと直感した七夏が追う。

「一体何があったんですか？」

肩に手をかけて引き留めようとしたところ、一瞥もしないまま払いのけられた。背中にも目でもあるのかと思える隙のなさが、身内の七夏に向けて発揮されている。

洩々といった様子で振り向いた篤史さんは開口一番、

「おうナナ。そんな余裕かましてて大丈夫か？」

と皮肉混じりに宣った。

「ただのセレモニーとたかをくくってるのか？ 甘いな。俺はやるからには本気で勝ちに行かせてもらう」

何も問い返せなかった。篤史さんの目がこれ以上ないほど真剣であったから。

「失礼とは承知しておりますが、不肖宮藤初、篤史さんの介添え役として全力でお手向かいさせていただきます」

「マジだぜ」

初さんとベンベンも完全にその気で、篤史さんを守るように立ちふさがってくる。結香さんだけはいつものごとく、ふにゃーっとしていたが。

「宗家選抜の儀式が終わるまで俺たちは敵同士だろう。馴れ合う

七夏達の前、ステージ上で宣言した黒男さんが、貴賓席へと不満げな目を向けた。視線の先では、珍しくも女物のスーツ姿のさおりさんがすまじ顔でふんぞり返っている。

玲韻さん達が動く事が前提になっているところをみると黒男さんにしても承知の上なのだろうが……このまま行けばまず百パーセントの確率でリセツトが必要になる。半ば愉快犯じみた嫌がらせのために、自分の死亡さえ前提の投機的作戦を立てられる神経が分からない。

リセツトに失敗したらどうするつもりなのかと小一時間問い詰めたところだが、既に状況は後戻りできない段階に至っている。

黒男さんは何かを振り払うように何度か頭を振ると、自らの白衣の肩に手をかけ、一息に脱ぎ放つ。

「それではっ、宗家争奪ファイトお、レディー・ゴー！」

白衣と袴からスパコンスーツに蝶ネクタイ姿に早変わりし、両手を突き上げて叫ぶ彼の姿は、いかにも自棄っぽく見えた。

黒男さんの宣言にあわせて何十発もの火花が打ち上げられ、紙吹雪とともに鳩が舞う。スピーカーからはド派手な音楽（ニュルンベルクのマイスタージンガー）が流れ出すとともに、スタンド席には『第七十七代斗流宗家争奪戦』の横断幕が掲げられる。

「まずは両チームのメンツを紹介させていただきます。まずはあっちゅんチームから、チームリーダーは新川篤史君」

「うーっす」

制服姿の篤史さんが立って右拳を打ち振ると、三塁側から歓声と拍手があがる。篤史さん派が向こうに集まっているってことか

「続いて遠野結香嬢」

「こんにちは」

気はない」

まさに宣戦布告と言える篤史さんの宣言。

それに対し、ふふんと鼻で笑う。

「私は誰の挑戦でも受ける」

豪語する詩紀ちゃんに動揺の様子はなかったが、これは面倒なことになったと七夏は思ったものだ。

何より、篤史さんの態度が解せない。

七夏が知る限りでは、篤史さんは詩紀ちゃんが宗家となる事を当然と考えていたはずだし、時に茶化すことがあっても彼女を立てていたように思える。

今回のことにしても、宗家候補を降りていたはずの篤史さんが形式的な対抗馬役を買って出たもの、と認識していたが……この豹変ぶりはどうしたのか。

儀式の上では本気での争いを演出しなければならないにしても、なにもプライベートまで対立する必要はないはずだ。詩紀ちゃんを不安にさせて良いことなど何一つ無いのだが。

そこで詩紀ちゃんとともに篤史さんの真意を探る事にしたまでは良いが、それも不十分なままで、七夏達は今まさに決戦の場に立たされている。

……まさかここまで馬鹿げた事になるとは思いもよらなかったが。

七夏達を含め始めて予想外の演出にとまどっている者も多いし、年嵩の参列者達は渋い顔をしているが、若手には概ねウケている模様。

出馬しては、本当に支持が割れて後に禍根を残す危険性がある。正式に詩紀ちゃんに決定した後にもさおりさんが事実上の切り盛りを続けるのもまず確定だし、いくら何でもやらせくさすぎるだろう。と述べておく。

「あとツンデレも小さいのも、僕業界では御褒美だから心配しないで」

「心配してない！」

「確かにそれは正論ね。でもどうする？」

七夏が出るにしてもあまりにもわざとらしいし、と思っていた矢先。

「俺が出るよ。対立候補として不足か？」

「了承。願ってもないわ」

退屈そうにスマホをいじりつつ煎餅なんぞ食べていた篤史さんが突然立候補を宣言し、さおりさんが一秒で了承した。

いや、誰であれ立候補の権利はあるのだが、格があまりにも釣り合わない場合は失笑を買う事になるだろう。能力的にも家柄的にも、篤史さんなら文句なしだ。もし詩紀ちゃんが居なければ、彼こそが次期宗家の本命として認められていた事は間違いないだろうから。

「それぞれ介添え役を三人まで選べるって事になってるけど」

可能、というのは名目であって、実際にはフルメンバー揃えておかないと格好つかない類だろうというのは想像に難くない。

「とりあえずナナは連れて行くとして」

了解も取らずにメンバーに入れられている、最初からそのつもりだったけど。

「とりあえず、ゆっかだろ」

同じ制服姿の結香さんが、にっこり笑ってびらびらと右手を振る。

篤史さんの時より若干拍手が増えたような。結香ちゃん、とか若い女性の声援も多い。しょっちゅう部活の助っ人に回っているだけあって、同性のファンが多いようだ。

「七瀬撫菜嬢」

「ん」

中部部のセーラー服に身を包んだペンペンが無表情で小さく頷く。無愛想な態度はいつも通りの彼女だが、とっておきのドクロペンギン眼帯を身につけているところを見ると、それなりには気合いが入っているらしい。ペンペンコールの主が八佐・十二尉級の士官クラスのおじさん主体なのがいささか気になるが。

「宮藤初嬢」

「どうか皆様お見知りおきを」

クラシカルなロングスカートのメイド服の初さんが立ち上がり客席に向かって恭しく腰を折ると、盛大な拍手が起こる。年齢層に関係なく男性からの安定した支持を受けているようだ。北落師門の恐ろしさを別にしても、彼女はただ優しいだけのメイドさんではないのだが。その辺、ある程度付き合ひの深い人間以外には分からないとみえる。

「のりちゃんチームのリーダー、新川詩紀嬢」

彼女がすっと立つと、わき上がる大歓声と拍手、どんどんどんと床を踏みならす音と凄まじい樞コール。

くーるーるー、くーるーるー、くーるーるー！
明らかにヒトでない達からの支持に参列者達が引きまくっているのが丸わかりだが、司会の黒男さんが平然としているため誰も

その結香さんはさきほどから篤史さんの肩にもたれてくーくー寝ている。篤史さんチームも、とりあえずで事後承諾。

五ヶ瀬と遠野家から一人ずつだから、バランス的には悪くないだろう。

「それだけだと七瀬と宮藤が鬱陶しいから、リンペンに初終、分かれてついてもらえる？」

介添えを出すというのは家としての支持の表明と同義だろうから、遠野家の結香さんを入れておいて両家を入れないわけにはいけない。万が一を軽んじない七瀬家は、形式だと分かっている候補者全員に唾をつけたがるだろう。宮藤家は主筋に対して義理を欠かすことを極端に嫌がる。苦情に先んじて手を打つ、さおりさんらしい見事な采配だ。本人達の前で各家への苦情じみた発言が無ければなお良かったのだが。

「じいちゃんがうざくて正直すまん。じゃあ年下ってことでひとつしのりんチームに」

「一の孫です。このたびは祖父がこのような以下略。自動的にあつちゃんチームで」

社交辞令でなくて本当にそう思ってそうなのが、いっそう宜しくない気がした。あと正確には双子なので姉妹ではあっても同じ年。

「では同じように、私は篤史さん・終は詩紀さんチームに分かれるということですよ。よろしいでしょうか？」

「……ああ、頼むわ」

「そんなところでしょ。よろしく、終、リンリン」

そんなこんなでチームが決まったまでは良かったが……儀式まであと一週間後に迫った日になって、話はとんでもない方向に向

突っ込むに突っ込めない様子。暴走した鬼斬りを人の技だけで相手取る肅清部隊の頭だけあって、精神の強さが半端無い。

「統いて五ヶ瀬七夏嬢……もとい、七夏君」

「よろしくお願ひします」
いや、さすがの黒男さんも動揺を隠せないか。でも今更そこをまぢがえないで欲しい。そしてこのナナちゃんコールはどうしたことか。男女関係なくナナちゃん呼ばわりしてくるのは勘弁していただきたいと七夏は閉口する。

「七瀬鈴菜嬢」

「やーどもども。どもども。リンリン呼んでつかあさい」

ちょびつと照れながら愛想を振りまく。軽薄なぐらひの陽気さは姉とは対照的だ。野太い声のリンリンコールは、主として陸奥家麾下の実戦部隊のさらに前線要員、すなわち侍頭以下のお兄さん達から発せられているようだ。

さもありなん。鬼憑きの中では扱いやすい能力を備えた七瀬の双子は苦戦中の戦場に増援として投入される事が多く、いつ何時格上の鬼と出くわすかわからない初期対応部隊にとっては騎兵隊のような存在だ。後方からの火力支援に徹するペンペンに対し、常に最前線に突入して腕力で物理的に鬼を叩き伏せていくリンリンは、若手の鬼斬り達にとってはあたかも勝利の女神のように見えるのだろう。

「宮藤終嬢」

「どうか皆様お見知りおきを」

初さんの時と同じような仕草に対し、同じように幅広い年齢層の男性からの支持を受ける終さん。
同じく一卵性双生児のリンペンがパッと見て相当雰囲気が違う

のに対し、宮藤の双子は髪型と長手袋が左右逆なだけで鏡写しのように見える。だが、心底お堅い初さんに対し、終さんの方は意外にお茶目だという事が最近分かってきた。同じく、意外にいい加減な詩紀ちゃんと気が合うのも終さんの方なので、今彼女は詩紀ちゃんのチームにいる。

両チームの全メンバーの説明は終わった。しかし、これが何のイベントなのかの説明がまだだった。先ほど黒男さんは宗家争奪ファイトなどと言っていたが、あまりにも端折りすぎなので補足が必要だろう。

これは読んで字のごとく、斗流宗家の座を實力で奪い合う儀式である。

まず、斗流宗家の継承は血縁ではなく實力による、という原則がある事を確認しておきたい。第一位新川家の第一子が自動的に宗家を継承できるというわけではないということだ。

事実、十家第一位であった壱川家が数百年間にわたって宗家を輩出してきたのは確かだが、一方で他の十家よりたびたび養子を迎えてもいる。表向きは序列のある十の家から成り立ってはいても、始祖達が鬼を封じた血脈をそれぞれに引き憑いた斗流十家は全体で一つの一族のようなもの。基本的には十家の内で最も濃く血の出た人物が第一位を継いできたと言える。

壱川本家に強い鬼使いがほとんど生まれなくなった事による指導力低下を憂慮した先々代の斗流宗家は、ここ三代にわたって強力な鬼使いを出した分家の新川家に第一位と星鬼『揺』を禅譲し、自らは絶えていた仁藤家の名を継いだそうで、なんとも思い切っ

詩紀ちゃんは（当然七夏もだが）来年は受験生。ここまで引張ったのなら、いっそ卒業まで待ってくれても良さそうなものだ。そう嘆息した七夏に、

「半隠居状態とはいえ、形式的には宗家サマのお達しだしね。尊重ぐらいはせざるをえないでしょう」

と、さおりさん。こんなに敬意のない部下がいて良いものか。目の前に当人の孫が二人いるというのに。

「どうせみんな第一志望は珠大エスカレーターでしょ」

と身も蓋もない。七夏達の進路調査票は第一志望が書き込み済みのうえ第二志望以下は斜線で消してあった気がするが。まあ、他に行きたい学校があるわけではないのだが。

「とにかく、対抗馬がいないと成立しないってのが問題なのよ」

談合であるうが出来レースであろうが、形式的な宗家選挙は行わねばならないという。ならばとにかく相手が必要だ。専門用語（？）で言うところの噛ませ犬というやつ。

だがこれまで詩紀ちゃんが無意識にやらしてきた数々の罪状（というのも気の毒だが）を思えば、形式的とはいえ彼女と敵対できるほど神経の太い人間はそう多くない。

「別に正式に宗家になりたくて仕方ない、ってわけではないわ。そんなものに関係なく、私は私なのだし」

自分のことだというのに、詩紀ちゃんは至ってクール。

「残念だけど引き受けてもらうしかないのよ。色々めんどくさい樞憑きは、簡単に逃げられない立場に祭り上げておくべきってのが爺さんどもの意向でね。私が仕事してないみたいに見られても困るし」

「少しでいいから歯に衣着せてくださいよ、さおりさん」

たものだと七夏は思う。鬼の血が出なかった人々の中には政治ゲームや蓄財にばかりうつを抜かしている勘違い連中も多々いるとはさおりさんの弁だが、国を守る武闘集団として家柄よりも實力を優先させなければ成り立たないという現実もまた厳然として存在するということだろう。

北斗最強の星鬼とされる樞を宿している時点で、詩紀ちゃんは斗流宗家の資格を十分以上に満たしている。『白銀珠比女命』の称号で呼ばれる樞憑きは初代より数えても五組としない。

斗流から詩紀ちゃんと樞に与えられた能力評価は「無種特型超特級四度」。すなわち、封印指定をなんとか免れるだけの安定性は備えているが、およそ分類不能の怪物でどうやって使って良いかも分からない、とでも言ったところ。戦略兵器級の火力を備えた宮藤姉妹と『北落師門』でさえ「三種呂型一級三度」にすぎないのだから、樞の別格ぶりが分かる。

珠坂を離れて一線を退いた新川の喜一お爺さんより宗家預かりに任じられたさおりをはじめとして、皆が詩紀ちゃんを事実上の宗家として扱っているのも当然と言える。しかし、宗家の座は正式には未だ喜一老のところにあるのだという。

そんなある日、

「そろそろ良かろうよ」

と、喜一さんの気まぐれな一言によって正式な宗家継承が決定したわけである。

ただ、残る問題が一つ。

篤史さん達の部屋に集まった紫城学園学生寮の住人達と十悟さんによって対策会議が開かれる事になった。

「何もこんな次期にやらなくても」

この暴言にはさすがに七夏も苦言を呈さざるを得ない。

「ならいっそおまえさんがやったらどうだ、対抗馬？」

と投げやりに十悟さん。そう言いたくなる気持ちはよく分かる。

「倒してしまっても構わん、ってわけじゃないでしょ？」

言う言う。

「学歴・収入は言うに及ばず、容姿でも性格でも胸囲でも私が圧倒的に優位なもの」

十悟さんの渋い顔を引くまでもない。問題発言だ。詩紀ちゃんを前にそこまで言える人間を他には知らない。

七夏が眼鏡属性でない分を差し引いても、さおりさんは確かに美人の分類に入るし、さほど背が高いわけはないのに出るところが出ているいわゆるランジスターグラマー（化石語）だが、性格的には詩紀ちゃんより遙かに問題が多い気がする。

「さあ、それはどうかしら」

いささか頬を引きつらせながら詩紀ちゃん、いや美紀ちゃんが

「私はまだ成長期だけれど、さおり姉さんはこれから萎れるだけですものね」

もう止まってそうな気がする。というか、そこ引っかかるべき所じゃないから。

「誰のせいだと思ってるの？」

「返す返すも申し訳ありません」

口にしてないはずのツッコミの内容で怒られてしまった。七夏はとりあえず頭を下げ、フォローしておくことにした。

さおりさんなら当て馬として申し分ないのは確かだが、今まさに宗家を預かって斗流を問題なく（？）切り盛りしている人間が